

Hitotsubashi
Quarterly



135th Anniversary
80 years in Kunitachi

Captains of Industry~知と業(わざ)のフロンティア

国立国際ゲストハウス完成

第3研究館完成

一橋大学史上初の
女性研究科長誕生

三商大戦50周年

三商大ゼミ60周年

創立135周年
一橋大学消費生活協同組合
設立100周年

進化する大学

《対談》
日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？
北海道知事

高橋はるみ氏
一橋大学長 杉山武彦
進化する大学

第3研究館と

国立国際ゲストハウスが完成

一橋大学消費生活協同組合

設立100周年

《特集》

目的は伝統の継承と交流

三商大戦今むかし

《対談》

一橋の女性たち

国際企業戦略研究科長

クリステイナ・

アメージャン

商学研究科准教授 山下裕子

《連載企画》

個性は主張する

カトリック司祭

伊藤 淳氏

《特集》

地球の風 地域の風

株式会社イムラ封筒 代表取締役社長

井村守宏氏

《対談》

前一橋大学長

石弘光氏

松井証券株式会社 代表取締役社長

松井道夫氏

《連載企画》

Captains

左右田喜一郎

巻頭特集

日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

【対談】

北海道知事／高橋はるみ氏
杉山武彦学長

内なる国際化への対応には、
グローバル・シンキングが欠かせない

特集
進化する大学

社会科学の国際研究拠点にふさわしい
環境整備進む

第3研究館と

国立国際ゲストハウスが
完成



一橋大学消費生活協同組合
設立100周年

研究室訪問 chat in the den

言語社会研究科教授／松永正義
経済学研究科専任講師／徐鳳晚

特集

三商大ゼミ60周年
三商大戦50周年

目的は伝統の継承と交流

三商大戦今むかし



20

1

10

14

18 16

47



42



36



32



12



1



連載企画

Capitains
左右田喜一郎

学問の創造者
天才学者左右田喜一郎の人となり



写真：[左右田喜一郎伝]
(1988年 齋藤慶司／著
有隣堂／刊)からの転載
藤澤五十鈴氏所蔵

連載企画

一橋の女性たち

32

【対談】

国際企業戦略研究科長／クリスティーナ・アメーリジャン
商学研究科准教授／山下裕子

連載企画

個性は主張する One and Only One

36

カトリック司祭／伊藤 淳氏

特集

【対談】

前一橋大学長／石 弘光氏
松井証券株式会社 代表取締役社長／松井道夫氏

42

Love of Culture

プリザーブドフラワー「枯れない花」の魅力

音楽趣味の垂直統合

44

Book Review

金融危機をどう考えるか

46

特集

地球の風 地域の風

47

株式会社イムラ封筒 代表取締役社長／井村守宏氏

Campus Information

◆2010年オープンキャンパス開催報告

53

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

54

◆社会学部連続市民講座2010開催報告

56

◆2010年9月25日

57

◆創立135周年・国立移転80周年記念式典を挙行了しました

58

◆一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念講演会

57

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？

北海道洞爺湖サミットや北海道を舞台にした中国映画

『フェイチェンウーラオ』

『非誠勿擾』（邦題『狙った恋の落とし方。』）の大ヒットで、

北海道は中国やアジア各国の人々にとって憧れの地となった。

さらに、恵まれた自然環境や観光資源、

安全でおいしい食べ物など、北海道は多くの可能性を有している。

まずは、道民自身がその秘められた魅力に気づくこと、

そしてみんなで知恵を出しあえば、

北海道は世界有数の地域へと発展できると高橋知事は語る。

一方、大学にとっても蓄積された豊かな資源の見直しは

重要な課題であり、推進すべき目標でもある。

そこに共通点を見いだした杉山学長が、

さまざまな角度から人材論にアプローチした。



杉山武彦 (すぎやま・たけひこ)

1968年一橋大学商学部卒業、1970年同大学大学院商学研究科修士課程修了、1974年同大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学。1974年成城大学経済学部専任講師、1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授。その後、商学部長、副学長を歴任し、2004年12月一橋大学長（現在に至る）。専門は交通経済。

高橋はるみ (たかはし・はるみ)

1954年富山県生まれ。1976年一橋大学経済学部卒業後、通商産業省に入省、1985年大西洋国際問題研究所（在パリ）研究員、1990年中小企業庁長官官房調査課長、1997年通商産業省貿易局輸入課長、2000年中小企業庁経営支援部経営支援課長、2001年北海道経済産業局長、2002年経済産業研修所所長、2003年退官。北海道知事就任（現在2期目）。



内なる国際化への対応には、
グローバル・シンキングが欠かせない

北海道知事

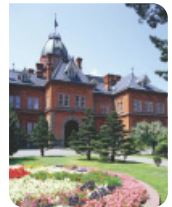
高橋はるみ氏

一橋大学長



杉山武彦

大学を卒業できない!?
今でも時折見る怖い夢



Harumi Takahashi vs Takehiko Sugiyama

杉山 国立大学が法人化されて6年。国立大学には、さらなる活性化が期待されています。地方行政にも同様のことがいえるのではないのでしょうか。今日は、「元氣な北海道！」をつくり上げるために、知事が常日ごろ考えられていること、実践されていることについて伺いたいと思います。

まず、せっかくの機会ですから、最初に学生時代の思い出についてお聞かせいただきたいと思います。

高橋 入学した1972年は、女子学生が増え始めた年でしたが、それでも35名くらいしかいませんでした。そのせいか、女子学生同士はとても仲がよく、みんなで誘い合って学生食堂に行ったものです。その中には、内閣府特命担当大臣（経済財政政策担当）を務められた大田弘子さんもおられました。卒業後当時の友人から、「高橋はるみはよく勉強していた」と言われることが多いのですが、それでも未だに大学を卒業できないという夢を見るのです。熱心に通っていた授業とそうではない授業があったからでしょうか。



杉山 講義はともかく、ゼミには熱心に出られたのでしよう。

高橋 経済原論の講義をわくわくしながら聴いていました。私としてはやはり「近代経済学だな」という気持ちが強くなりましたので、大変な倍率の中を荒憲治郎先生のゼミに入れていただきました。

杉山 学生時代には、AIESEC（アイセック）*にも所属されていたと記録がありますが、国際的なことにも関心があったのですか。

高橋 国際的なことへの関心というよりも、まず他大学の人を含めた人々との交流に期待がありました。当時の国立は、今と違ってもっと田舎でしたから、都心に出かけて行って、さまざまな人と交流するのがとても楽しかったですね。

日本一だって夢ではない 北海道の潜在力に惚れ込む

杉山 一橋大学で学んでよかったと思われることがありましたら、お聞かせください。

高橋 一橋大学で教えていただいたことで一番印象が強いのは、ものの見方や考え方です。いろいろな現象や対象を自分で見て、考えて理解していかなければいけないということをしたき込まれました。近代経済学における考え方、競争の重要性ですね。人間の本質において競争が重要だということが私自身の考えの柱の一つになったのは、大学時代です。

杉山 大学で学んだことが、実際の仕事の場面で活かしていると感じることはありますか。

高橋 私が北海道と直接的に関わったのは、2001年に北海道経済産業局長に就任した時からです。当時は、橋本行革で北海道開発庁が国土交通省の一つの局になってしまい、従来、インフラ整備のための資金が北海道に投入されていたとは別の方法で活性化を進めなければなりませんでした。そこで、局長時代には、まず北海道を深く知ろうと努め、さまざまな北海道の魅力が見えてきました。食料自給率200%、森林があつて水も豊富、自然環境が素晴らしいなど、潜在力と可能性に満ちあふれています。そうした、さまざまなことを実感し、北海道にすっかり惚れ込んでしまいました。当時の私の気持ちは、「北海道の素晴らしい潜在力と可能性を磨き上げれば、全国に、そして世界に打って出られる」ということでした。中には悲観的なことを言う人もいますが、自分でよいと思ったことには、誰が何と言おうと迷いたくない。そして現実的かつ具体的な政策へと落とし込んでいく。このように発想し、行動できるその素地は、一橋大学のゼミで培われたものです。

トップは最終責任者 だからこそ自分で決断する

杉山 すばらしい話ですね。国家公務員として組織の一員となって仕事をしていたときと、知事になっ

* AIESEC（アイセック、Association Internationale des Etudiants en Sciences Economiques et Commerciales）
世界最大規模の学生による国際的非営利組織。
主幹事業は海外インターンシップ生の交換事業。



トップとは、たとえどんな結果であっても、最終的には、自分が責任を取る覚悟がなくてはなりません。

てからとで大きく変わった部分はどのようなところですか。

高橋 組織の中で仕事をするときには、全体のパフォーマンスを高める発想が必要です。また、個人がいかに良い発想を持っているか、個人の行動力には限界がありますので、それをチームプレーの中でどう実現していくかということが重要であり、そのためにも、組織マネジメントの発想が必要です。潜在力や可能性にこれだけ優れているのに、今の北海道の厳しい状況を一人でも多くの道民にお伝えし、多くの方々に、変えていこうという強い意志を持っていただき、さまざまなおことにチャレンジしてもらわなければなりません。

例えば、先般「米チェン！」キャンペーンというものをやりました。米の生産量では、北海道は新潟県と1、2位を争っています。しかし、従来は、道民自身が北海道米をあまり食べておらず、道内における北海道米の食率は4割にも満たないという状況でした。新潟や秋田などほかの米どころでは多くの県民が自県のお米を食べています。道民が自分たちの食べているお米を北海道米にチェンジするだけで、大変な変化です。関係者を挙げての努力もあって、今では北海道米の食率は8割ぐらいになっています。こうした身近なところから課題を掘り起こし、道民の意識を変えていく、そういうことを一つ一つやってきました。

またトップになって強く実感したのは、自分が最終責任者であるということ、何があっても自分が責任を取るという心構えが必要です。例えば、ある案件で周りが全員A案に反対していても、自分としてはA案がベストであれば、私はA案を選びます。知事になった直後は、周りの意見に迷ったこともあ

りました。しかしそれでは本当の主体性をもって責任を取ることはできません。トップとは、たとえどんな結果であっても、最終的には、自分が責任を取る覚悟がなくてはなりません。ですから、自分の判断を信じようと考えます。これは、学長さんも同じだと思います。

トップになるには、それなりの覚悟も必要だし、本当に苦労も多いのですが、政治家としての喜びもあります。それは、組織人のときにはなかった、有権者の声が直接入ってくることです。女性の声が入ってきやすいのは強みですね。


杉山 それは高橋知事が、さまざまな声が入ってきてきやすいような状況をつくっているということでしょう。

グローバルとローカルが 渾然一体となってきた

杉山 この対談のシヨルターフリーズには、「世界競争力のある人材とは？」とあります。グローバル化が進む世界にあって、今や組織としても個人としても、競争相手は、国内だけではない。こうした時代にあって十分に競争に打ち勝つために、人材にはどのような素養が備わっているべきかということがテーマとなります。一橋大学は、伝統的に「キャブテンズ・オブ・インダストリー」を謳ってきましたが、6年ぐらい前からグローバルリーダーの育成という表現も使いはじめました。そのための教育としては、ITリテラシーや語学、専門領域のほかに広い教養も身につけさせる必要があります。知事としては、競争力のある人材というとき、どのよ



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？



特定の分野で
エキスパートになるには、
自分でものごとを考え、
自分の力で
道を切り開いていく必要があります。



うなことをお考えになりますか。

高橋 国際競争力のある人材というと日本から海外に出て活躍する人材のことを思いがちです。しかし、どんなに田舎でもグローバル化の波が押し寄せてきています。例えば、リーマンショックや世界同時不況などが、海の向こうの話と置いていたら、その影響で、最近、地元の洞爺湖温泉のお客が減っています。現代は、グローバルとローカルが渾然一体となっているのです。ですから、グローバル・シンキングができる人材が、国際競争力のある人材ではないでしょうか。北海道内に、こうした発想ができる人が一人でも多くなるようにしていきたいですね。

一昨年の北海道洞爺湖サミットには中国の胡錦濤国家主席もお見えになり、このたび中国からの観光客に対するビザ発給条件が緩和されることになりました。2009年の2月には北海道を舞台にした中国映画『非誠勿擾』フニチエンウラオが大ヒットしました。中国の皆様にとって今や北海道は憧れの存在で、中国からの観光客数は爆発的に増えています。北京を訪れた際、中国人民政治協商会議全国委員会主席賈慶林氏チャチンリンと話をしましたが、中国には北海道に関するクイズまであるということでした。こうした環境の変化にあつては、旧来型の対応では当然不十分です。地域に立脚しつつ、国際的な視野をもって発想し、ものごとを考えることのできる人材が必要なのです。

杉山 すばらしい環境、おいしい食事……北海道のもつそのような価値を最大化していくためには、新しいタイプの人材が必要になってきますね。
高橋 そうなんです。北海道には潜在力は大いにあ

ります。付加価値を高め、道内GDPを高めて、豊かな北海道を築いていくためにも、常に新しい発想で考え、失敗を恐れずに挑戦する行動力を有する人材が今後一層求められていきます。

「使える英語」と「自分で考える力」

杉山 洞爺湖サミットを機に、北海道で行ったG8大学サミットには14か国35大学が集まりました。これも北海道のいいイメージづくりにつながったと思います。ところで、大学は今、社会貢献と社会連携が強く求められていますが、北海道の場合はどのようなことを期待されていますか。

高橋 道内には7つの国立大学と多くの私立大学があります。期待したいのは観光分野を学問的に究めて、実学に活かすことです。北海道大学には観光学高等研究センター（石森秀三センター長）がありますが、実践的にさらに付加価値を高めていく意味でも、道内の大学には大いに期待しています。

杉山 母校である一橋大学に期待することがあれば、お聞かせください。

高橋 一つは語学ですね。サミットのときにG8の首脳と一緒に記念植樹をしました。その際、5分間スピーチの時間をいただいたのですが、急なことだったため、言いたいことの半分も言えませんでした。しゃれたフレーズの一つも言いたかったのですが……。そこで、一橋大学では、ぜひ実用的な英語が身につくよう指導してもらいたいですね。

自分で考えることを

積み重ねていかないと

実社会では通用しません。

そうしたトレーニングが

重要だと思っております。

日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？





Harumi Takahashi vs Takehiko Sugiyama

杉山 今年からカリキュラムの中に英語で履修できる授業を増やしました。これまで、留学生向けに提供していた英語による授業群の科目数をさらに増やして一般の学生にも開放しました。また、今年度から、ブリティッシュカウンシルと契約して、学生の英語力を伸ばすためのネイティブスピーカーによる授業のプログラムも用意しています。そして、将来的には、海外留学を卒業要件にするというようなプランも構想中です。

高橋 語学は頭が柔らかい若いうちにたたき込んで、反復訓練をしていくことが重要ですが、できることなら社会人向けに実学英语の講座も開いてほしいですね。

もう一つは、自分で考えることです。私は、自分で考えることを一橋の先生に教え込まれました。例えば、1年次に学ぶダイヤモンド・カーブ（需要曲線）とサプライ・カーブ（供給曲線）。「どちらが右上がりか、考えたらわかるだろう」と言われて、確かに価格が上がれば消費者は買わなくなります。これは単純な例ですが、自分で考え、自分が納得したものでないと、自分で発信はできません。特定の分野でエキスパートになるには、自分でものごとを考え、自分の力で道を切り開いていく必要があります。

杉山 以前に、授業を担当していたときに気になったのは、質問をしてもすぐに「わかりません」と答えてしまう学生の多いことでした。

た。私が望んだのは、知っているとか知らないとかではなく、学生が自分で考えるところです。仮に知らなかったとしても、自分の持っている知識を総動員して考えてみるのが重要なことです。自分で考えることを積み重ねていかなないと実社会では通用しません。そうしたトレーニングが重要だと思うのですが、このことは高橋知事の経験と一脈通ずるものがありますね。

高橋 「自分で考える」という指導が脈々と続いていることを知って心強いですね。

杉山 最後に、学生に対するメッセージやアドバイスをお願いします。

高橋 国立大学らしからぬ自由闊達さと実学重視の姿勢、動いている世の中に対するものの方や考え方を若いころから身につけられる……これが一橋大学の魅力であり、こうした環境で学べることの幸せを感じていただきたいですね。払った授業料分はきっちり先生方から吸収するということです（笑）。学生数が少ないこともあって一橋ブランドには希少価値があります。例えば、北海道の同窓会組織である北海道如水会も、会員は少ないですが結束力は本場にすばらしい。一橋大学で学んだというだけで、社会は「ああ、そうなんだ」と予断を持って見てもらえます。注目されているわけですから、そこで能力を発揮しなければなりません。北海道同様に、みなさんのポテンシャルはすばらしいものがあります。ガンバレ！一橋生！！

杉山 あたたかいエールをありがとうございました。



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？





新しい国際研究拠点・第3研究館



ゲストハウス群を整備



一橋大学消費生活協同組合設立100周年

進

化

す

る

大

学

社会科学の国際研究拠点にふさわしい環境整備進む 第3研究館と国立国際ゲストハウスが完成

流動性へのパスポート？

21世紀を目前にした1999年6月に開催されたケルン・サミットで、「ケルン憲章―生涯学習の目的と希望―」が採択されました。そのポイントは、「経済や社会はますます知識に基づくものとなっている。教育と技能は、経済的成功、社会における責任、社会的一体感を実現する上で不可欠である」「来世紀は柔軟性と変化の世紀と定義されるであろう。すなわち、流動性への要請がかつてないほどに高まるだろう」「将来には、流動性へのパスポートは、教育と生涯学習となるであろう」ということです（外務省HPより）。

この憲章が予言したとおり、国際的な流動性は高まり、学生や研究者の国際交流は

ますます活発になっており、その重要性は増してきています。

そこで文部科学省は、(1)優秀な人材を自国に惹きつけること、(2)国際的に活躍できる自国人材を育成すること、(3)国際的な知のネットワークへ参画すること、(4)特定地域との重点的な連携を行うこと、(5)相互理解を促進すること(「高等教育の国際化に関する課題の整理及び今後の検討の進め方」より)を目標として、わが国の高等教育機関の国際競争力の強化を図ろうとしているのです。

社会科学分野における研究スタイルも、個人中心型から国際的な人的交流を含めたプロジェクト型が主流になってきています。

こうした環境下にあつて一橋大学では、

21世紀に求められる先端社会科学の研究教育の世界的拠点として、日本、アジア及び世界に共通する重要課題を理論的・実践的に解決することを目指しています。そして、

(a)新しい社会科学の探求と創造
(b)国内・国際社会への知的・実践的貢献
(c)構想力ある専門人・理性ある革新者・指導力ある政治経済人の育成
(国際化推進本部「ビジョン」より)

の3つを使命としてあげています。その実現に向けて、一橋大学の「知の総力を結集してグローバルな情報ネットワーク(略)を構築」し、外国人研究者や留学生があふれ、国際的なマインドが醸成される「キャンパスの国際化」をさらに加速させていくようにしています。

新しい国際研究拠点・第3研究館

世界トップレベルの研究環境とグローバルなネットワークの構築には、研究を担う優秀な研究者の獲得が不可欠です。一橋大学を来訪した研究者を中心としたネットワークをこれまで構築してきたネットワークにプラスすることは、教育、研



究面での国際化を促進する上で大いに効果的です。人材の国際的な流動性が高まっている現在の、優秀な人材になればなるほど、世界規模で注目が集まります。そこで計画されたのが、グローバルな研究スタイルに対応し得る、研究に特化した第3研究館の建設です。

国立キャンパスには、登録有形文化財の兼松講堂はじめ、ロマネスク様式の歴史的建築物がいくつも存在します。まず第3研究館を建てるにあたり留意したことは、外観はキャンパス全体との調和がとれていることです。鉄筋コンクリート造4階建て、床面積約2266平方メートル、重厚ながら緑あふれる国立キャンパスにすんなりとけ込める格調高い造りとなりました。

当初は、5階建てのフラットな建物にする構想や、総ガラス張りといった斬新なデザインにしようという意見もありました。しかし、研究を中心とした建物だけに、外観はほかの建物と調和した落ち着いたたたずまいのほうがおさわわしいと考えたのです。

第3研究館建設のコンセプトを整理す



多目的室

エントランス



研究会議室



コンファレンスルーム



第3研究館：外観



ると、(1) 研究を中心とする建物、(2) 周りの建物と調和する建築様式(外観)、(3) 内部の研究環境の質のよさ、の3つになります。

したがって内部は、海外からの長期、短期の研究者が落ち着いて研究できるスペースづくりを基本としています。さらに、若手研究者がよい環境の中で研究できるように支援するという狙いも込められています。具体的には、研究室のほか、プロジェクトの受け皿となるプロジ

エクトルームや研究会議室、多目的室を配置し、グループミーティングやシンポジウムなどへの対応も考慮しています。

研究室や廊下境の間仕切壁の遮断性を高め、落ち着いて研究できる工夫をしているほか、福祉対応エレベーターやオストメイ ト対応の多目的トイレを設置するなど、ユニバーサルデザインを採用しています。情報管理、危機管理といったセキュリティ面でも十分配慮されており、利便性という機能性といい、グループ研究に最適な空間となっています。

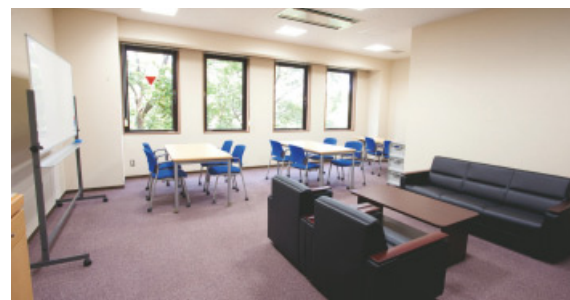
ゲストハウス群を整備

一橋大学では、留学生以外にも対象を広げた全学オープンスタイルの英語による授業科目群を設けています。それだけ「キャンパスの国際化」を積極的に進めていこうとしているのです。

国際化を推進する上で、留学生や外国人研究者用の住環境整備は、非常に重要なテーマとなっています。今までも、小平キャンパスにある国際学生宿舍及び小平国際ゲストハウスにて、留学生及び外国人研究者約450人が日本人学生約350人とともに暮らしています。ここでは、各種交流事業やお祭り、イベントの共同開

催、日本文化を学ぶ講座など、地域と連携した交流を行っています。また国立キャンパスには、外国人研究者専用の住宅も完備しています。

加えて2010年4月には、国立キャンパス近くの国立市東4丁目に国立国際ゲストハウスを建設しました。これは、国際化が活性化する中で、海外から招聘する研究者の数も年々増えているからです。第3研究館の計画にみられるように、最近では来日する研究者の滞在形態が変わってきています。客員教授の滞在期間は通常1年間ですが、短期のプロジェクトで来日する



第3研究館：多目的室

第3研究館 意匠設計者のコメント

2009年3月に環境配慮型プロポーザルにて取り組みました第3研究館は、歴史的な趣のキャンパスに融合する外観デザインとして周囲との調和を図りました。エントランスホールや会議室などの内部は豊かな環境を創造する空間デザインにより、研究者や学生などの利用者にアカデミックな環境の中で快適に研究活動に勤しんでいただけの建築を目指しました。

一級建築士 小川直樹氏



ケースも増えてきました。

国立国際ゲストハウスは、国立の静かな住宅街の一角に位置するだけに、周囲と融合するデザインが採用されています。もちろん、住環境としても高品質な快適性を重視しています。延べ床面積約

873平方メートル。約20戸、約41〜48平方メートルの夫婦室3戸、約64平方メートルの家族室4戸を整備。各戸には家具、エアコン、風呂、住宅家電、固定電話、インターネットなどが備え付けられ、さまざまな家族構成に対応した造り



エントランス

になっています。

この新たなゲストハウスの完成で、国立に3か所、小平に1か所の外国人研究者用住宅が整備されたこととなります。

ちなみに、お隣の中国ではほとんどの大学に外国人研究者用のゲストハウスが整備されており、宿舎はかなり充実しているそうです。アメリカでも、郊外型の大学はキャンパス内にゲストハウスを擁しています。新ゲストハウスの開設により、一橋大学の宿泊環境は、グローバルスタンダードと肩を並べたといえるものとなったのではないのでしょうか。

進展する国際化に向けての体制づくり

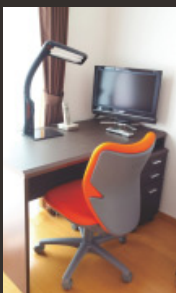
海外研修、留学、調査研究、国際シンポジウム、海外出張……国際化の進展には、危険やリスクもともなっていることを忘れてはいけません。そこで、一橋大学では、海外で活動する学生や教職員を安全対策面と法的側面の両面からサポートし、教育研究の交流活動で想定されるさまざまなリスクや危機的な状況への対

応を目指しています。例えば、自然災害への対応や異文化適応、個人情報・知的財産権の管理など、危機管理体制を整備しつつあります。リスクマネジメント面では、リスク対応型の発想で、ダイナミックに国際化を推進しようとしているのです。

国立国際ゲストハウス：外観



単身者向け居室



既婚者向け居室



ファミリー向け居室



● 国立国際ゲストハウス ● 意匠設計者のコメント

● **外** 国人研究者等宿舎は世界各国から集まった研究者が研究プロジェクト単位で滞在するために設計された施設です。

● 計画地は文教地区に指定されており周囲には多くの学校施設があり、閑静な町並みは住環境としても良好な印象を与えております。本デザインは周囲の環境との調和を考慮し、シンプルにまとめ高さを抑えた景観を阻害しない計画としました。

● 一級建築士 梅澤裕介氏

大学創立135周年、国立移転80周年、三商大ゼミ60周年、三商大戦50周年。

そして、一橋大学消費生活協同組合も 設立100周年を迎えました

1903年の一橋会発会式にて福田徳三教授が消費組合設置の必要を訴えてから7年後の1910年、

一橋大学（東京高等商業学校）内に消費組合が正式に設立されることになりました。

2010年に100周年を迎える、「一橋消費組合」を前身とする一橋大学消費生活協同組合の歴史を追ってみました。



東京商科大学時代の様子。1923年より独立会計での運営を始めるが、事業を軌道に乗せるのは容易なことではなかった。写真：『東京商科大学卒業記念写真帖』（1930年）より転載

大学昇格に向けて 学生生活の充実を求めて 一橋会が発足する

「我校には未だ寄宿舎等の設備なきを以て、在校生活会合して互に胸襟を開く機会なく、数百の学生々徒は、朝には教室に集まり、夕には四方に散じ、各自の間何等意思の疎通なく、数年の間、校を共にし級を俱にするにもかかわらず、遇々路傍に会するも互に語るなく又礼するなく、甚しきに至りては、其名を聞くも其人を知らず、其人を見るも其名を知らずして、卒業するに至る」（『一橋会雑誌』第1号）

この一文からもわかるように、当時の一橋大学（東京高等商業学校）では、学生による自治組織がなく、そのために学生間交流が希薄だったようです。大学昇格を熱望する中、学園の現状に危機感を持った学生たちは、1902年、学生連合の結成を決議しました。運動部（ボート、弓術、撃剣、柔術）、学芸部（英語、研究、編纂）の2団

体を構成員とし、「一橋会」が船出をしたのです。やがて「一橋会」は活性化し、学生による活動団体が増えていくこととなります。ところが、活動費が不足しつづつあることから会費が上がり、ひいては会員数の減少という事態が生じてきたのです。そこで「一橋会」の活動費を新たに確保する必要が生じ、かねて学校側から勧められていた「消費組合」設立の機運が学生間にも高まり、1910年度の第一期始業式を目前にした9月9日に「一橋消費組合」が設立されました。続いて、同月22日の「一橋会総会」で「一橋会」の附属組織となったのです。

最新のビジネスモデルを 学生が疑似体験する場

「消費組合」とは1820年にイギリスのロバート・オウエンが、労働者を貧困から救済する手段として発案した、経済活動のしくみです。その後オウエンの「協同組合思想」は、1840年代にイギリスのランカシャーの綿紡地帯ロッ

テルにてロッチデール公正先駆者組合として発展することになりました。ロッチデールの成功は、世界中の評判となり、日本からも多くの研究者がかの地を視察し、新しい経済活動の方法としてイギリスの消費組合思想を日本に紹介したのです。一橋大学においても、上田貞次郎教授がオウエンや協同組合に関する論考を多数発表し、上田の指導を受けた緒方清教授は、イギリスに留学し、消費組合研究に精力的に取り組んでいます。（平成17年度一橋大学附属図書館企画展示・オウエンから一橋へ…消費組合の設立と展開 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/owen/co-op-jp.html>）

一方、福田徳三教授は、「消費組合」を学生が実践する格好の最新ビジネスモデルととらえ、設立の必要を訴えています。「特に我学校に学生たる諸君は、異日我邦経済上の枢機を握る可きものなるを以て、今日より現在に於ける最も進歩せる経済組織の団結、共同的の経済行為に向て専ら修養を積まるるは、予の最も切望する所

なり。彼の瑞西の如きは、国内到る処、商業学校学生の経営に成れる消費組合を見ざるなし」(『一橋会雑誌』第1号)

紆余曲折を経ながらも 独立組織として歩む

こうして1910年に設立された一橋大学の「消費組合」は、学長を会長とし、学生が主体的に組織する自治体、「一橋会」の財源確保のために設置されました。しかし、その100年の歩みは、けっして平坦なものではありませんでした。1923年には一橋会の会計から切り離されたものの、業績不振の問題や社会情勢の変化から組織解体の危機がありました。戦後になって、「一橋大学消費生活協同組合」へ改称し、教職員と学生を組合員とする生活協同組合定款を定めました。1957年には法人格を取得し、現在に至ります。

ここで明治期の「消費組合」に関するエピソードをご紹介します。まず興味深いのは、学生が中心となって経営を行う組合が、日々の業務に携わる専任の職員を雇用していることです。1912年発行の『一橋会雑誌』第79号には、当時の職員の様子がうかがえる投書があります。「吾人が第一に不快に感ずるのは小僧^{*1}・教練の甚だ不十分な点だ。場内に入っても小僧は隅の方に居て見向きもしない」。新しい試みであったからでしょうか、職員の教育にまではまだまだ手が回らなかったようです。また、一橋会雑誌に投書内容が掲載されていることから、当時から「消費組合」には、消費者の声を吸い上げ経営に活かそうとする姿勢が見てとれます。また、「消費組合」

は、大学の有事の際や時代の混乱期に活躍しているという記録も残っています。1931年に起こった籠城事件^{*2}の際に、会計部に所属する一橋消費組合食堂部が中心となり、



籠城事件の際、学生は統制の利いた組織だった抗議活動を展開した。「一橋消費組合」は兵站部門で貢献した。写真：『籠城事件写真帖』(1961年)より転載

籠城のための食事寝具等の兵站業務を担当しています。(依光良馨『大学昇格と籠城事件』／如水会刊) また戦後の食糧難の際には、いち早く消費組合活動を再開したという記事が一橋新聞に記載されています。(平成17年度一橋大学附属図書館企画展示・オウエンから一橋へ…消費組合の設立と展開 <http://www.libhit-u.ac.jp/service/tenji/owen/co-op-jph.html>)

教員、職員、学生が議論を重ね、 必要とされる生協の姿を模索する

「消費組合」が設立された当初、組合の主機能は衣類や文具、雑貨など学生が必要とする物品の販売でした。21世紀を迎え、私たちの消費行動は100年前に比べて大きく変化しています。世の中はモノで溢れ、商品の多様化が進んでおり、学生にとっての「必要」も単純化することはできません。一橋大学消費生活協同組合でも、広がる学ニーズに対応するために物販にとどまらない、様々なサービスを展開しているのです。その中に

は収益金の一部を国内外で研究発表を行う大学院生の渡航費に充当する、学部生の奨学金に活用するなど、学生支援にも広く貢献しているのです。学生活動の財源を確保するという100年前に設定された目的が、形を変えながらも脈々と受け継がれているのです。

こうした一橋大学消費生活協同組合の活動を支えているのが、教員、職員と学生が一体となり運営する理事会です。現在の理事会は総数19名で構成され、1名の専門職員を除く全員が教職員、学部生、大学院生で構成されています。月に一度の定例理事会を開催し、組合員からの要望や事業計画について、立場や年齢を超えて自由に意見を出し合っています。理事会とはつまり、消費者ニーズを吸収する場であり、経営の課題を解決する場として機能しているのです。現在全国には、200を超える大学生協があり、全てが独立した組織として同様の形態で運営されています。中には、経営状態が順調とはいえない組合もあるのですが、事業成功のカギは理事会の生協に対する強力なコミットメントが握っているようです。



定例理事会では、一橋ならではの事情に沿った施策、一橋らしさを活かした商品・サービスを検討していく。

*1 歴史的な表現であるため、引用元のまま記載しております。

*2 籠城事件(1931年)／東京高等商業学校は1920年に大学に昇格し、東京商科大学(現一橋大学)となります。当時の東京商科大学は大学本科に加え、予科、専門部、教員養成所を有する大学でした。しかし1931年、政府は緊縮財政の一環として、予科と専門部、養成所廃止を企図する方針を発表しました。籠城事件とは、政府のこうした方針に反発した学生が大学内に籠城し、抗議を行った事件です。

台湾を考えることは、 東アジア百年の歴史を 考えることだ

タブーだった台湾研究に 私を取り組んだきっかけ

大学では学園紛争、中国では文化大革命の最中である1968年に中国語

中国文学科に入学しました。中国について考えるには日本との関係を抜きにできません。さらにつきつめていくには侵略の原点である台湾統治についても知る必要があります。そう思っているときに、戴國輝さんに出会って、



『童年往事』
(邦題「時の流れ」)
1988年公開作品
(発売終了)



『多桑——父さん』
1994年公開作品(発売終了)

台湾研究の手ほどきを受けることができました。ちょうど台湾で民主化運動が活発になってきた時期でした。こうして関心が民主化運動に移っていき、自然と関連性が深い台湾の現代文学に興味を持ち始めたわけです。

不思議なことに当時、とりわけ中国研究者にとって台湾研究はタブーになっていました。しかし、80年代以降アジアに対する関心が高まり、89年の天安門事件での大陸中国に対する幻滅感、台湾の民主化運動に対する関心などから、次第に台湾研究者が増えてきました。

台湾ニューシネマで

台湾に関心を持ちだした日本人

70年代の台湾研究は、国民党研究とほぼイコールでした。つまり、台湾の

民衆が何を考えているかといった視点が欠如していたのです。だからこそ、民主化運動の進展が、研究者を引き付けていったといえるでしょう。ちなみに、80年代に私たちが台湾小説を翻訳するまで、台湾小説はほとんど日本に入ってきていませんでした。

一般的には、台湾ニューシネマといった映画の文脈で知られていた程度です。それも作家・映画研究家の田村志津枝氏がプロデュースしたマニア向けのものでした。ところが90年代になって、『悲情城市』が大ヒットしました。これは、国民党政府による「台湾大屠殺」2・28事件(1947年)を映画で初めて取り上げたものです。民主化運動の成功のうえに立った作品であり、87年の戒嚴令解除後の社会の自由化を反映している作品といえます。こ

うした映画を入り口として、台湾に關心を持つ日本人が増えてきました。

華文文学と異邦人としてのアイデンティティの相克

世界華文文学というジャンルがあります。台湾や香港など、中国本土とは別の領域だが中国が領有権を主張している、主権のあり方が中国本土とは異なる地域の文学。東南アジアの華僑・華人社会、インドネシアやマレーシアなどアイデンティティが明確ななかで華人系として生きている人たちの文学。あるいはアメリカやヨーロッパなどに移民として入っていった人たちの文学……中国系の人たちは数多く集まるとなると独自のコミュニティを持ちますから、そこに独自の文学が生まれます。

彼らが中国語で綴る文学は、華文文学になります。しかし、アメリカなど英語圏では、地域に定着して2世、3世となり、日常的には英語を使います。英語で書いたときは、華人文学ではありませんが、華文文学ではありません。80年代には留学生文学が流行りました。海外に留学しているときは、華文文学で、中国に帰ると中国文学のなかの留学生文学というジャンルになるわけです。さらに、各国によってアイデン

ティティが違います。混沌としています。が、いずれにしても複雑なアイデンティティのありかたが問題になります。

「落葉帰根」から「落地生根」へ 価値観の変化が独自性を生む

東南アジアでは、マレーシアやシンガポールなどで華文文学が盛んです。そこでは、各国のなかで、華人系住民としてどう生きていくかということが問題になります。大陸中国には世界華文文学学会があり、華文文学は中国文学を基盤とした文学であるとして、その共通性を強調しています。つまり、マレーシアやシンガポールの文学を中国文学の支流と見なしているのです。これに対して、80年代初めに東南アジアの人たちが中国文学とは違う独自の文学であると異議申し立てをしました。

このようにはっきり主張ができるのは、マレーシアなどでは戦後独立した際に、華人は国に残るか中国に帰るかを選択を強いられたからです。かつては、外地で成功して故郷に錦を飾る「落葉帰根」が理想でした。しかし、自分たちのアイデンティティを模索し始めた60年代に入ってから、その土地に根をおろしてやっていこうという「落地生根」へと価値観が変わってきたのです。

独自性を踏まえた

台湾ナショナリズムの芽生え

台湾では大陸中国とは別の形で社会を築いてきています。日清戦争は中国の革命を加速させましたが、ちょうどその時から台湾では日本統治のもとで近代的社会づくりを行うことになりました。戦後は冷戦体制下にあつて、別な枠組のなかで、まったく別の社会づくりを行ってきたのです。

しかし、日本支配で大陸と切り離されたこともあつて、台湾では中国ナショナリズムと合流することで日本支配から脱しようという動きがありました。つまり、台湾ナショナリズムとの二重構造になっていたのです。その共存は、日本支配時代には矛盾がありませんでした。

民主化運動が始まる前は、国民党政権が国家社会の方向性を決めていました。冷戦構造が主要な決定要因で、台湾の民衆の立場が直接反映されているわけではなかったのです。

70年代になって、台湾では民主化運動、中国では文化大革命が始まりました。外省人支配のなかで、台湾人は中国人と違うという台湾ナショナリズムが強くなっていくのです。70年代の米中

国交回復により、台湾は独立した国際的な人格を求めようになってきました。大陸に対する台湾ナショナリズムから、李登輝の「新台湾人」が生まれます。

冷戦構造が崩れて、それぞれの社会のなかでの民主化運動の動きが、社会の方向性の決定要因になってきました。それまでは、国民党政権は中国というフィクションのうえに立つことで、台湾人の主権を制限してきました。台湾は中国という大きさを否定することで、民主化が進んでいったのです。なお、元来の台湾語は福建省出身者が多いこともあつて、閩南語という中国のなかでも辺境の言葉です。しかし、最近ではその台湾語で書こうという運動が起こっています。これも台湾ナショナリズムの表現のひとつです。

日本人は80年代に入ってから、台湾への関心を強めています。台湾について考える際には、歴史を踏まえて考えることが必要です。日本、中国を含む東アジア百年の歴史を考えることこそ、台湾を考えることなのです。(談)

言語社会研究科教授

松永正義

(まつなが・まさよし)

1973年東京大学文学部中国語中国文学科卒業、1978年東京大学大学院人文科学研究科(中国語中国文学)単位取得満期退学。1986年～1992年一橋大学経済学部助教授、1992年～1996年一橋大学経済学部教授、1996年一橋大学大学院言語社会研究科教授として現在に至る。著書に『台湾文学のおもしろさ』(研文出版 2006年)、『台湾を考えるむずかしさ』(研文出版 2008年)などがある。



場所と場所とのつながりを 洞察するのが地理学

地理学は帝国主義とともに発展してきた学問です。帝国主義的膨張には風土や地域性などの場所に関する知識が必要だったからです。一方で、人間にはもともと知らない場所に対する好奇心があります。また、居住地域が広がっていくに従って地理的ニーズが高まってきます。このように地理学には、自然に発展してきたという側面もあり、社会科学の中でも歴史が古い学問の一つです。

高校時代までに学んできた地理は、ある場所の特徴を探るといったことに主眼をおいていました。しかし、大学レベルの地理学では、場所と場所とのつながりに関する洞察が必要

知識は吸収するものではない。 自分の経験を通じて創り出すものだ。

になります。つながりは自然にできるものはありません。人や企業などが介入することでさまざまな動きが発生します。その流れと、流れが生ずることによる場所と場所とのつながりの状態、さらにはその特徴を理解することが必要なのです。

最近では、交通機関の発達、IT技術の進展もあり、人、モノ、情報、資金の流通が高速化していますが、こうした社会環境の変化を踏まえ、場所と場所との関係、その中における個人や企業、政府といったさまざまなフアクターの役割を学ぶことが大学レベルの地理学なのです。とりわけグローバル化する社会にあって、地理学は、世界の動静を理解するのに役立つ学問といえます。

「場所の空間」から 「フローの空間」へ

マニユエル・カステルの説く「場所の空間」「フローの空間」という概念があります。これまでの社会は、移動が限られた小さな場所の中でお互いに交流していました。高密度な地域内同一性の高い社会をベースとしているのが「場所の空間」です。しかし、「フローの空間」では、様相が違ってきます。地域を構成する人々の中で、移動性の差が拡大してくるのです。例えば、大企業であれば自分たちの論理で自由に行動することが可能ですが、地域に根ざした中小企業ではそうはいきません。資本と労働、大企業と中小企業の関係など、さまざまな格差が生まれてくるのです。

ジオポジションナリティの概念で 経済システムを分析

地理学を学ぶのにあたって重要なのは、オープンな姿勢で臨むというアプローチです。世界にはさまざまな経済システムがあります。人間性も違えば、文化的背景も違うし、政治形態も違う社会のもとに資本主義が成り立っています。そこに存在するあらゆる可能性を排除するのではなく、ありのままに認識すれば、人間や企業、政府が多様なフアクターによってつながっており、お互いに影響しあっていることが見えてきます。つまり、さまざまな資本主義が混在しながら、グローバルな経済システムを構成しているのです。

韓国の場合、1997年の経済危機以降の政策改革によって、資本市場が自由化され、海外資本の流入など海外とのつながりが広がってきました。そして、新自由主義的な仕組みが導入され、既存の開発国家を中心とした経済システムに新たなチャレンジを与えました。経済地理において、こうした自国の経済のあり方やグローバル社会の新たな可能性を探っていくのも、1つの大きな課題です。

私の研究姿勢は、地域にこだわらずさまざまな場所で経済地理学の理論を試そうというところにあります。最近では、経済危機や経済発展パターンに関心を持っています。例えば、97年の韓国の経済危機とその後の発展パターンが地域の発展にどうつながっているか。アングロサクソンの経済が韓国にどう影響し

ているか。「ジオポジシヨナリテイ」という概念で考えています。

97年の経済危機以降、韓国は海外の経済とのつながりを拡大してきました。日本やアメリカとのつながりが中心だったのが、ヨーロッパや多くの開発途上国とのつながりへと広がってきたのです。そのつながりの中で韓国の経済がどうなっているのかを研究しています。興味深いことに、経済危機以降韓国では開発途上国に対する貿易や投資が顕著に増えています。大企業を中心に貿易ネットワークが広がっているのです。一方、金融面で見ると欧米の資金がかなり増えています。金融的な流れと貿易・投資の流れが乖離しているのです。

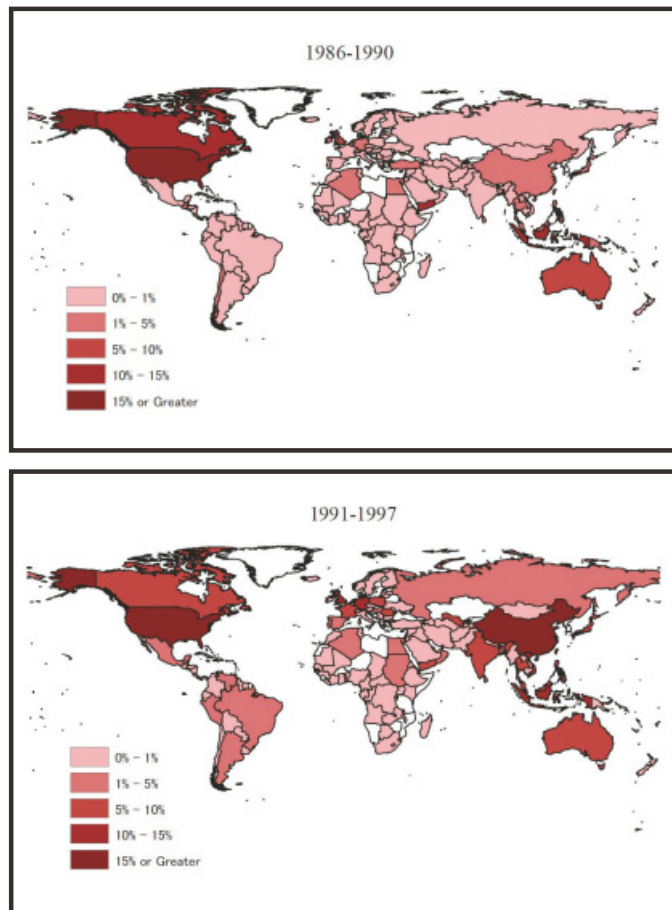
2007年、2008年の金融危機では、当初韓国はあまり影響を受けませんでした。しかし、1997年の経済危機後の改革で形成された新たなジオポジシヨナリテイによって、株式市場や為替市場は売りが先行してしまい、その後は金融危機の打撃を受けた開発途上国との貿易で苦労しています。つまり、経済危機後の韓国経済は海外の流れによる影響を受けやすくなってきたのです。こうした経済の構造転換をジオポジシヨナリテイという概念で説明しようとしているのです。

GIS活用で

新しい発想が生まれてくる

地理学教育・研究にあたっては、現場に出て調査することを重視しています。私もかつて

Geographical Distribution of Korean FDI



Source: Korea Export-Import Bank, Overseas Investment Statistics

て修士時代に、1カ月炭鉱村でインタビューして街の状況を分析したものです。昨年は本学の学生と一緒に池袋のチャイナタウンの調査を行いました。チャイナタウンという横

のです。まるで芥川龍之介の『藪の中』です。このような経験から、学生は教室ではなかなか得られない現場の大切さを知ることができたと思います。知識は吸収するものではなく、ある意味では自分の経験を通じて創り出すものなのです。

人は自分の経験によって見るものは、限られています。自分の考えが必ずしも正しいとはいえないのです。それを認識していないといけません。そのうえでネゴシエートする力が必要になってきます。さらには、社会的な立場によるパワー関係にも留意しなければなりません。

社会科学全般で空間について研究が活発化してきました。テクニクとしては、GIS（地理情報システム）が有効に活用されています。データが盛り込まれた地図を見ると新しい発想が生まれてきますし、直感で捉えることができます。（談）

浜の中華街のようなイメージを抱きますが、実際に行ってみるとそんな風情は全くありません。そこで学生とともに池袋の商店街の人や中国人にインタビューを行いました。立場が違っていると、話の内容も事情も大きく異なり、だれの話が正しいのか全くわからなくなってしまうました。学生は、メディアで得た情報をベースに仮説を立てて情報収集に臨みましたが、現場ではメディアと違ってさまざまな立場からの多くの異なった発言が現れてきた

経済学研究科専任講師

徐鳳晩

(ソー・ボンマン)

1991年ソウル大学地理学部卒業、1993年ソウル大学地理学部修士課程修了。1996年～2002年ミネソタ大学地理学科 Instructor, Teaching & Research Assistant、2003年～2005年フロリダ国際大学 International Relations & Geography 学部客員助教授、2004年ミネソタ大学地理学博士号取得。2005年一橋大学経済学研究科専任講師。

三商大ゼミ

三商大戦

5060

周年

特集

三商大戦

目的は伝統の継承と交流

三商大戦今むかし

2010年6月25日、第50回三商大戦の開会式が、今年の幹事校である大阪市立大学にて開催されました。これから12月までの間に各クラブは大阪市立大学に遠征し、交流戦を行うこととなります。

体育会総務と

応援部が支える三商大戦

「三商大戦の伝統は、各クラブの中に脈々と受け継がれています。私は、入学と同時にフィールドホッケー部に入学しましたが、三商大戦は年間

活動計画の中にしっかりと組み込まれていました。それは他のクラブも同様です」と語るのは雨宮祐一郎さん。雨宮さんは、体育会総務で三商大戦担当を務めています。主な役割は、三商大戦の学内広報と神戸大、大阪市立大の担



男子フィールドホッケー部
経済学部4年
雨宮祐一郎さん



男子フィールドホッケー部
経済学部3年
加来純平さん

当者と連絡を取り調整作業を行うこと、そして各クラブが行う交流戦のスケジュールと成績の管理です。今年で50回目を迎える三商大戦の一橋大学からの参加クラブ数は23。なかには交流戦ではなく、合気道部のように合同稽古を行うクラブもあります。開会式が行われたのは6月25日ですが、一橋大学からは、雨宮さんと来年度の体育会総務三商大戦担当を務める加来純平さん、そして応援部が参加しました。開会式では、各校応援部による演武が行われました。

「運動部はそれぞれが地域の大学リーグに所属しているため、その合間を縫って三商大戦に参加することになります。開会式や閉会式はあるものの交流戦のスケジュールは各運動部に委ねられています。ですから運動部によっては開会式以前や閉会式以降に試合が行われることもあります。三商大戦は、7月から12月にかけて開催される、非常にマネジメントが難しい長い大会なのです。ですから、私の役割は大会を統括するということよりも、次に繋ぐためのノウハウを学ぶというスタンス



第50回三商大戦開会式

で行っています。3年に1度は一橋が幹事校を務めなくてはなりませんから」（雨宮さん）

他大学との交流は貴重な体験

一橋大学、神戸大学、大阪市立大学の先輩方が築き、伝統を守ってきた三商大戦ですが、特に一橋大学は、立地が唯一関東ということもあり、運動部に参加する学生以外には、ほとんど認知されていないと雨宮さんは言います。「多くの学生に三商大戦の存在を知ってもらうため、ポスターを貼ったり、生協にお願いして期間限定で三商大戦特別メニュー

を作ってもらったりしました。それでも広報活動が全学的な盛り上がり結びついているかは、いまひとつ感触がつかめません。もともと一橋大学では、学生の約3割は運動部に所属していますので、それぞれの運動部では盛り上がっているのだと思います」（雨宮さん）

2011年は、一橋大学が幹事校になるため、来年の担当者である加来さんにとっては緊張感が少し違うようです。「幹事校としての大会を運営するわけですから、責任は重いです。今年の大会をしっかりと観察し、来年の大会を成功させたいで

すね」（加来さん）

各運動部への働きかけや学内広報など苦勞の多い三商大戦担当の仕事ですが、そこには大きな喜びもあると雨宮さんは語ります。「他大学の学生と交流できるのは、大変刺激になります。また、三商大戦を熱心にバックアップしてくれる応援部の学生と知り合いになれたことも収穫です。大学の伝統についても理解が深まりました。今まで三商大戦の伝統を守ってこられた先輩方には、とても感謝しています」

さて50周年記念大会総合優勝の栄冠は、どの大学の手に渡るのでしょうか？



第50回三商大戦ポスター



第46回三商大戦ポスター



目的は伝統の継承と交流
三商大戦今むかし

第50回三商大戦参加団体と開催スケジュール（2010年8月末日現在）

参加部活	日程	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
バスケットボール部	7月1~4日		●●●●					
弓道部	8月14~16日			●●●				
柔道部	11月23日						●	
馬術部	未定							
アーチェリー部	9月中旬				●			
バレーボール部	未定							
バドミントン部	12月24~26日							●●●
陸上部	7月10日		●					
硬式野球部	8月24日			●				
準硬式野球部	10月下旬					●		
サッカー部	8月7日			●				
空手道部	未定							
フィールドホッケー部	12月初旬							●
ボート部	6月13日	●						
ハンドボール部	7月10・11日		●●					
競技ダンス部	8月7・8日			●●				
水泳部	8月21日			●				
ラクロス部	7月4日		●					
体操部	9月19日(仮)				●			
サイクリング部	9月上旬				●			
剣道部	11月下旬						●	
ソフトテニス部	8月下旬			●				
合気道部	未定 合同稽古(試合なし)							

※記載されている参加団体がポスターと一部異なりますが、こちらが正式に決定している情報です。(2010年8月末日現在)

剣道部にとつての 三商大戦

三商大戦の記事を作成するにあたり、編集部には、一つの疑問がありました。三商大戦は、今年で50周年を迎えました。しかしそれは総合大会としての歴史であり、個々の運動部を主眼に三商大戦の歴史を見たとき、その伝統は、それぞれに異なっているのです。そこでHQQでは、27号で三商大戦について、読者の皆様に情報提供協力を呼びかけましたところ、剣道部OBの方がご連絡をくださいました。本稿は、『二橋剣道部八十年史』（一橋大学剣友会 大倉徳治／編・発行 1983年）および『士魂』を参考に構成しています。

76年の歴史を持つ 剣道部の三商大戦

三商大総合大会が初めて開催されたのは1942年です。それに先駆けて1934年に剣道部では三商大戦を行っていました。三商大剣道連盟の創設など、そこには単にスポーツの交流と

は違った武道ならではの理想を求める姿がありました。一橋大学剣道部にとつては一つの転換期ともなったのです。しかし、その誕生は「関西武者修行の落とし子」としてのものでした。

関西武者修行が きつかけとなって 三商大剣道連盟が誕生

かつての一橋大学（東京商科大学、以下東京商大）剣道部は、内部での修行を重視して、個人完成に努めるといふ孤高の道を歩んでいました。しかし、これでは発展性に乏しいと、大正時代から関西武者修行を行ってききました。1933年の第4回関西武者修行が三商大剣道連盟成立に繋がったのです。

そのいきさつは、『士魂第六号』に記されています。同誌によると、当初一橋大学側はどちらかというとと定期戦には受け身だったようです。それは、剣道部が一橋会*1を脱会直後で「財政的にも精神的にもまた技術的にも」沈滞しており、部の立て直しの

最中で、ほかのことに目を向ける余裕がなかったからです。

その年の1月に神戸商業大学（以下神戸商大）監督から定期戦の打診があったときにも、前向きな返事はしませんでした。5月の全日本学生剣道連盟の大会に出場するため上京した神戸商大監督との会談でも、関西武者修行の準備に追われる一橋側と定期戦を熱望する神戸側とで、かなり温度差があったようです。

しかし、関西遠征を控えた6月半ばに、神戸商大側から「神戸に来た際には練習試合をしたい」との申し出があったて少し風向きが変わってきました。この申し出は神戸商大側としては第一回の定期戦として位置づけようという発想もあつたようですが、一橋側は関西武者修行の一環として受け入れたのです。

1934年3月、委員長引き継ぎの際に、新旧委員長の定期戦承諾という意見の一致と先輩たちの賛同を得て、定期戦実施を承諾する旨を神戸商大に連絡しました。ちょうど同じ時期に大阪商科大学（以下大阪商大）の剣道部長から三商大リーグ戦



1934年（昭和9年）頃の稽古風景

23～24ページの写真は全て

『一橋剣道部八十年史』

（1983年 一橋大学剣友会 大倉徳治／編・発行）からの転載



1935年（昭和10年）7月第2回三商大連盟大会（神戸商大道場）

の申し込みがありました。部員総会で議論した結果、三商大戦のほうに意義深いと衆議が一致しました。さらに、この三商大戦を有意義にするためには、年一回試合をするリーグ戦ではなく、連盟をつくり、その共同活動を通じて各剣道部の発展を図ろうと、三商大剣道連盟を創設することになったのです。

佐野善作名誉理事の 祝辞に見る 三商大剣道連盟の精神

関西武者修行が一つのきつかけとなり、三商大剣道部が共通の理想を目指しながら、ともに発展していこうということになりました。三商大戦が「関西武者修行の落とし子」と言われているゆえんです。こうして1934年7月14～15日に国立有備館で三商大剣道連盟第1回大会を開催することになりました。その精神は、結盟式での佐野善作名誉理事の祝辞に見てとれます。

「東京神戸大阪三商大剣道連盟成り、本日を下して其第一回戦を行う。洵に近代の快事なり。夫れ三商大は本邦商業教育界に於る最高学府たると同時にその

*1 一橋会／1903年に設立された学生自治組織。運動部、文芸部により構成されていた。



中枢機関なりとす。即ち常に相提携して斯界を指導統率するを以て任とせざるべからず。近時各方面の事業に三者の協賛乃至連盟を見るは蓋し当然と謂うべし。然れども運動競技の如きは其勝敗にのみ重きを置き、其精神を軽視する時は寧ろ害ありて益なきに至るを以て、事之に従う者は克く此点に留意し愆なきを期せざるべからず。

抑々剣道は本邦固有の武道にして、晩近外来の運動競技の類と其選を異にし、其理は深遠を極め、其業は精妙を尽し、古来大丈夫心身鍛練の具法として普く尊崇せられ広く重用せらる。儻し本連盟の試合に参加する者徒らに其業の末の奔り其理の本を忘るるに於ては音に連盟の目的に違背するのみならず亦剣道の権徳を傷くるものと謂うべし。其罪赦すべからざるなり。敢て蕪辭を抒べて祝辭に代う。以上

第一回大会は熱戦の末 三つ巴引き分け

7月14日8時10分、有備館前で結盟式を挙行。大会がスタ

ートしました。初日の紅白試合は、第一戦が神戸商大対大阪商大、大阪商大対東京商大、東京商大対神戸商大の順で続きました。ちなみに戦績は——神戸商大対大阪商大が不戦3人残して大阪商大の勝ち、大阪商大対東京商大は不戦3人残して東京商大の勝ち、東京商大対神戸商大は不戦1人残して神戸商大の勝ちでした。

15日は個人試合。大阪商大対東京商大は7対3で大阪商大の勝ち、神戸商大対大阪商大は6対4で神戸商大の勝ち、東京商大対神戸商大は7対3で東京商大の勝ちという結果に終わり、三つ巴の形となりました。三商大剣道連盟の規約により再試合はしませんでしたが、第一回大会にふさわしい熱戦の結果でした。

なお、試合後に一橋大学剣道部に30年来伝わる鹿島神伝直心影流形の勤行が行われました。それは、「法定」「韜」「小太刀」「刃挽」です。そこで、一橋大学剣道部では1934年を鹿島神伝直心影流形復興の年としても記憶されています。

第2回大会は翌1935年7月に神戸で実施。1936年は東京から2年連続関西遠征する



1956年(昭和31年)4月新入部員歓迎会



1958年(昭和33年)復活第一回旧三商大定期戦(於神戸大球場)

のが財政的に苦しいことから休戦としました。そこで、開催地に関する規約を一部変更して、大阪、東京、神戸、休戦というサイクルで開催することになりました。(現在は毎年開催で休戦なし)

1937年には三商大剣道連盟主催の全国高商剣道大会が大阪商大の道場で開催されました。残念ながら第二次世界大戦が激化してきた1942年に閉幕しましたが、これも商業教育界をリードする意識と剣道界を盛り上げようという三商大剣道連盟の意気込みをよく示しています。

戦後の中断を経て さらなる発展を続ける

剣道部の三商大戦は、1942年に実施された第9回大会で中断してしまいました。しかも、戦後はGHQの指令で剣道が禁止されてしまいます。その理由は、剣道が戦いのための精神教育とその訓練だと判断されたからです。防具や竹刀、木刀などがガソリンをかけられ燃やされてしまったところもあります。そこで、1950年にはスポーツの竹刀競技だということで、全日本撓(しな)競技連盟が誕生しま

した。戦後の苦しい経済状況にあっても剣道が続けたいという人は多かったのです。そして、1952年のサンフランシスコ講和条約発効によりついに剣道禁止令が解除されました。

一橋大学でも剣道部が復活しました。正確にいうと戦前の剣道部とは関係なく、剣道部をつくろうという動きがあったので、その動きを剣友会*2が知ることにより、剣道部の歴史と伝統が継承されることになりました。OBたちが復活に向けて積極的に力を貸したのはいうまでもありません。

こうして過去と現在が繋がり復活した剣道部の戦後第一回の三商大戦は、1958年に神戸で開催されました。

現在、剣道部の部員数は34名、うち女子部員5名。剣友会会員約600名。76年前に先輩たちが孤高性の中に閉じこもっていたことから脱して、広く外に目を向けたことにより始まった三商大戦が、一橋大学剣道部の発展にどれだけ寄与したかれません。三商大戦は現在も重要な大会の一つとして位置づけられ、一橋大学剣道部の学生たちは、日々修養を積んでいます。

*2 剣友会/1925年に結成された剣道部の卒業生団体。

Captains

連載企画

一橋大学創世記。

そこには、新しい価値を創らんとする力があつた。建設者としての誇りと意志があつた。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第6回では、左右田喜一郎の足跡を追ってみた。



第6回

左右田喜一郎

写真：「左右田喜一郎伝」（1988年 齋藤慶司／著 有隣堂／刊）からの転載
藤澤五十鈴氏所蔵

学問の創造者

天才学者左右田喜一郎の人となり

洛陽の紙価を高らしむ——という言葉があります。晋の左思さしが「三都の賦」を著したときに、その人気のあまりそれを書き写そうという人が多く紙価が上がってしまったというわけですが、大正時代に洛陽の紙価を高らしめたのは、左右田喜一郎の『経済哲学の諸問題』でした。流行作家の作品ではなく、学術的な専門書が当時の学生に熱狂的な支持を集めた理由はどこにあるのでしょうか。

「博士の学説を軸として社会的学問の理論体系のつくり直しが行われていた」（1922年当時神戸高等商業学校生／元横浜市立大学教授・故早瀬利雄氏）。カントの哲学を批判的に発展させ、社会科学の論理を確立し、経済哲学の可能性という未踏の分野に果敢に切り込んでいった左右田の理論が、当時の学生の知的好奇心を刺激したのでしょうか。ただし、その内容は多くの学生が「途中で挫折」するほど難解なものでした。

左右田喜一郎が国内で活躍したのはわずか14年に過ぎません。そのため業績の素晴らしさの陰に隠れて、その人となりがみえてこず、天才学者として伝説化してしまった面があります。学問的奥深さの追究は幾多の研究書に譲って、『H.Q.』では、その人となりに焦点をあてることで左右田の時代のCaptainとしての姿を紹介いたします。

学生たちを魅了した創学の天才

1922年に刊行された『経済哲学の諸問題』は、昭和初期の学生たちを魅了しました。後に一橋大学長となる歴史学者の増田四郎（1933年卒）は、こう回想しています。

「岩波書店から出た先生の名著『経済哲学の諸問題』と『文化価値と極限概念』が、私も学生にはすでに容易に入手できない状況にあったこともあって、熱心な学生の中には、図書館所蔵のものを全巻原稿用紙に筆写していたものもいた」

これほど青年たちの心を捉えた左右田の哲学は、どのようにして形成されたのでしょうか。まずは、その淵源としての左右田の少青年時代を訪ねてみるとしましょう。

Y校で精神上の父・美澤進と出会う

左右田家の祖先は越後の国の豪農で（刈羽郡吉井村）、左右田の数世代前から上州（群馬県鬼石町）に出てきて、商人となりました。左右田の父金作は次男でしたので、丁稚としていろいろな商店に奉公に出ていましたが、明治

維新の直前に横浜に来て両替商に勤め、そこで財産を成しました。1895年に左右田貯蓄銀行を設立、これは横浜の有名な大きな銀行となります。喜一郎はこうした恵まれた家庭で生まれており、やがて家業である銀行を継ぐという路線が敷かれていました。

左右田喜一郎の秀才ぶりは群を抜いていました。『わが母校わが友』によると、1887年に横浜小学校入学と同時に2年に編入されて、尋常科、高等科8年間の課程を7年で済ませており、横浜商業学校（愛称Y校）でも予科1年1学期の試験終了後に2年生に進級しています。

ちなみにこのY校は、1882年に横浜の商人たちがつくった私立学校で、後に横浜市立になりました。不平等条約下の横暴な外国人商人から商権を奪回したいという悲願のもとに設立されたものでした。同様の問題意識のもとに1875年に森有礼が銀座尾張町に開設した商法講習所が一橋大学の前身となったわけですから、連綿と伝わる在野精神は両校に共通していたと言ってよいでしょう。

左右田はつねづね、「自分の学問上の師はカントであるが、精神上の父は美澤先生である」と言っていました。福沢諭吉の推挙でY校の初代校長として赴任したのが、その美澤進でした。

当時のY校は横浜唯一の最高学府であり、商家の師弟を中心に向学心のある者はY校を目指したといえます。美澤校長の教学の中核は「誠」であり、スマイルズの『自助論』を重視していました。そのパーソナリティから人格的感化を生徒やその保護者に与え続け、Y校は「美澤さんの学校」であり、美澤校長は「全横浜の先生」として慕われていたのです。

野球、ボート、乗馬……スポーツマン左右田

Y校教育では、知・徳・体のバランスを重視しました。学術、修身、衛生（保健体育）が同等に評価されており、学業のみの秀才では優等生とは認めら

れません。当然、左右田は大変なスポーツマンでした。

左右田は、Y校野球部で活躍、ボート部も創りましたが、面白いのは、左右田や仲間たちは本科三年で卒業目前だったため、せっかくなつくつたボートを一度も漕がずに卒業してしまったことです。

さて、左右田は、1898年7月に神田一ツ橋にあった高等商業学校に進学します。総煉瓦造りの校舎は木造バラックのY校校舎とは雲泥の差で、とりわけ講堂は「東京随一の一橋講堂」と喧伝されていたほどです。ここでも左右田は、スポーツマンとしての一面を示しています。無二の親友である坂西由蔵はこう記しています。

「彼は強健なる体躯の持主であった。Y校時代には元気なスポーツマンとして知られ……高商でも同級生中、大男の部に属し、入学以来ボートを漕ぎ、



写真：『左右田喜一郎伝』（1988年 齋藤慶司／著 有隣堂／刊）からの転載 藤澤五十鈴氏所蔵



写真：『左右田喜一郎伝』
(1988年 齋藤慶司／著 有隣堂／刊)からの転載
藤澤五十鈴氏所蔵



学問的感激を与えた福田徳三

左右田が本格的に学究生活に入ったのは、本科3年になってからとみられます。坂西によると、「彼が最初の深き学問的感激を与えられたのは、高商本科3年在学中あたかも外国留学を終えて帰朝した福田徳三教授が比較経済史講義（明治三十四年十一月開講）及び諸論著において示した真理の外何ものにも屈せざる学理討究の精神からであった」と記すとおり、福田徳三の影響

明治三十三年から選手となり、同年春（本科一年第三学期）のクラス対抗レースに優勝したが……なお明治三十二年（十九歳）頃より乗馬に興味をもち洋行前までその練習を続けた」

が大きかったようです。なお、左右田と坂西由蔵、また慶應義塾の小泉信三は、福田門下でもその実力は群を抜いており「三羽鳥」と言われました。しかし、福田徳三は1906年に校長と衝突して突然退官に追い込まれてしまいます。結果的に慶應義塾に赴任することになるわけですが、浪人中は左右田家の別荘に寄寓することになるのです。

フックス教授との出会いとドイツ学会での活躍

左右田を敬愛していた第13代日銀総裁の深井英五が、左右田の留学先決定のいきさつを語っています。深井がロンドン出張先の正金銀行ロンドン支店で、左右田と面談した際のこと。正金銀行支配人は左右田の父金作の意を受けて、ある商業大学への留学を勧めました。左右田の希望はケンブリッジ大学で理論経済を学ぶこと。支配人から意見を求められたとき、深井は左右田の固い意志を察して、「其の志を遂げしむる方が好いではないか」と答えたのです。

「私の当座の差出口が決定に影響した訳ではなく、喜一郎氏の志は夙に奪うべからざるものであったに違いありません。ケムブリッジ大学に入り、更に独逸に転ぜられたのであります。……其後数年を経て、慶応大学の堀江帰一博士が欧州より帰られた時、左右田喜一郎と云う青年学者の名が独逸の学会に噴々たるを聞き、あの正金支店で逢った若い人がそうだったかと驚き且つ喜んだのであります」

ケンブリッジ大学では、アルフレッド・マーシャル、ウィリアム・カンニングの2人の高名な経済学者に師事しました。しかし、左右田に強く影響を与えたのは、カルル・ヨハネス・フックス教授などドイツのフライブルク大学の教授たちのほうでした。深井が語っているようにドイツに移ってからの左右田の活躍にはめざましいものがあります。フックス教授のゼミナールでの研究報告をベースに発表した『クナップ新貨幣学説と貨幣の本質』は、ドイツ人研究者に大きな刺激を与えました。福田徳三は、この論文などにみる

批判的精神を評して「左右田君は私がはじめて邂逅せる学理抗争の人です」と書いています。

ドイツにおける左右田の師はフックス教授であり、『貨幣と価値』はフックス教授の指導のもとに作成された学位論文となっています。しかし、フックス教授の影響を受けた痕跡はありません。むしろ、論文の中では手厳しく批判しているくらいです。この自説と相容れない弟子をフックス教授は可愛がり、陰に日向に支援しています。この温かい人間性との触れ合いが、左右田のドイツ生活をどれほど豊かにしてくれたかしれません。

左右田が約10年間暮らしたバーデン＝ヴュルテンベルク地方は、深い森と湖、草原に恵まれた風光明媚な静かな地で、素朴な人情に溢れた暮らしやすさのところでした。師であるフックス教授の人柄とあいまって、このままドイツに永住するのではないかとも思われていたほどです。

その左右田のもとに、「精神上の父」である美澤進から手紙が届きました。そこには、教育勅語とY校校訓が自筆でしたためられていたのです。

「おそらく僕が、長らくドイツに滞留して、いつまでも帰朝しないので、それを諷諷されたのであろう。父も寄る年波である、早く帰朝して安心させよ、という意味を婉曲に誨えられたものであろう。ただ真正面から帰れと言ってやっても、強情なああの男の事だから、なかなか応とは言うまい。勅語と校訓によって日本人たる自覚を促し、間接に訓戒されたものであろう。僕はそう考えて肅然と襟を正したのである」「戴いた勅語と校訓は、考えた末、一番大切な書物の間に挿んで捧持することにした」（『美澤先生』）

『経済哲学の諸問題』の序文冒頭には、このときの想いがこう記されています。「今猶夢寐忘る、能はざる西欧十年の遊学を卒へ、花の都を見ずて、帰る雁の思いをなし、日に日に文化の中心を遠ざかる憂愁を抱きてシペリヤの平野を東行し、再び故国の土を踏みたりしは想い起せば早や既に四年の昔なり……」

こうして、ドイツを離れパリでフランス哲学を学んだ後に帰朝しました。1913年7月32歳のときでした。

学者、思想家、実業家の三足のわらじ

帰国した年の12月に、母校である東京高等商業学校の講師として迎え入れられます。翌年には左右田銀行取締役、株式会社左右田貯蓄銀行取締役に就任しました。銀行とはいえ左右田家の家業であり、跡取り息子としては継がざるを得なかったでしょう。1915年、父金作の逝去により、両銀行の頭取に就任します。ただ、左右田は、その後も論文を次々と発表、これらの論文を集めた『経済哲学の諸問題』が、前述の通り、洛陽の紙価を高らしめたのです。

学者・教育者、思想家、実業家として、傍からは順風満帆な状況にみえますが、本人の心境としては必ずしも満ち足りたものではなかったようです。『経済哲学の諸問題』の序文には、こう記されているのです。「再び故国の土を踏みたりしは、想い起せば早や既に四年の昔なり。爾来思うところ而して希うところ、悉く事、志と違い、世事紛々、俗事擾々、復曩日の古之学者為己の境地を悠遊するを許さず、余が学問研究の行程に於て、退歩の跡こそあれ、進趨の趣の認むべきなく、日夜懊惱悶々の情に堪えざるものあり」

1922年3月に左右田銀行と左右田貯蓄銀行が合併、株式会社左右田銀行となり、左右田はその頭取となります。そして、神奈川県社会事業協会副会長に就任、6月に横浜社会問題研究所を設立します。資本家の立場でありながら、社会問題、労働問題に真正面から取り組んだのです。そのころ、Y校同窓会幹事長を引き継ぎました。1922年はY校創立40周年にあたり、同窓会は美澤先生在職40年を感謝する祝賀であると寄付金募集を開始。その秋に盛大な祝賀式典を開催しました。

翌1923年9月1日、関東の地を大震災が襲いました。この関東大震災による横浜の被害世帯は95・5%と経済的には壊滅。左右田家では、横浜の本邸も東京の別邸も全壊してしまいました。さらに、16日には、「精神上の父」美澤進が逝去。左右田には震災以上に大きな打撃でした。葬儀の際の声涙と



横浜市南仲通り一丁目2番地にあった左右田銀行本店
1906年(明治39年)2月発行の商工会議所月報第112号に掲載(横浜商工会議所所蔵)

もに下る左右田の弔辞は、会葬者に改めて大きな悲しみを呼び起こすとともに、大きな感銘を与えました。

美澤の校葬が終わったあとの同窓会の事業は、美澤の墓碑建立と美澤記念像の製作でした。ここでも左右田は徹底したこだわりをみせています。例えば、加藤郁二(Y校OB)に依頼した「美澤先生之墓」の文字。加藤は毎日書き続けたが左右田はなかなかOKを出しません。百枚目になってようやく「よし」と頷いたというのです。

さらに同窓会幹事長として力を入れたのは、Y校昇格運動です。本科5年、専修科2年の7年制商業学校だったY校専修科は、左右田たち同窓生の強力な運動により、1928年に横浜商業専門学校(Y専、後の横浜市立大学)が誕生しました。

預金者保護のために私財を提供

当然ながら家業の左右田銀行も、関東大震災で甚大な損害を蒙りました。震災により横浜全域が壊滅してしまっただけですから、横浜を中心に事業を行っており、しかも不動産取引の比率の高い左右田銀行のダメージは大変なものでした。日銀は震災手形法のもとで特別融資により銀行に資金を供給することに決定しました。前出の第13代日銀総裁深井によると日銀に現れた左右田は、「自分の希望は銀行の復興という事よりもこれ迄左右田家を信頼してくれた預金者に損害を与えないことである。そのためには私財の全部を提供する覚悟である。…(中略)…いま特別融資を受けて開店し一部の預金者に支

払を為すよりも、寧ろ閉店の儘清算整理に入る方が宜しい」と主張したといえます。しかし、左右田銀行が開業しないと人心が動揺し不安に陥るので、時機をみて単独整理に入ったほうがいいという説得にしたがって、整理を目標として開業することになったのです。

深井は、「私は喜一郎氏が学者たる外、人間として、又実行家として常人に非ざることを其の晩年に認めたのであります。銀行及び預金者のためには其の努力を多とすべきであるが、此人を俗務で煩わすのは惜しいと思つた」と書いています。結果的には、1927年3月に襲つた金融恐慌により名門左右田銀行は横浜興信銀行と合併することになりました。同年、左右田は責めを負つて、東京商科大学、京都帝国大学の講師、貴族院議員など一切の公職を辞しました。辞任の報が伝わりと学生有志間に留任運動の動きが起りましたが、かえつて迷惑になるだろうということから、この運動も立ち消えになりました。

破綻しかなかった銀行整理業務中に病魔に襲われた左右田でしたが、学者としての姿勢を失うことはありませんでした。『哲学研究』に『西田哲学の方法に就いて』という論文を発表、これが学問上の絶筆となっています。

1927年8月11日、重患により逝去。享年47歳。ドイツ学会でも大きな存在感を示した左右田ということもあり、知己であるエミール・レーデラーは、ドイツの『フランクフルター・ツァイトウングス』に、左右田を悼む記事を寄せています。

学生の視点でみた左右田のゼミ教育

教育者としての左右田姿勢をよく表しているのが、1925年1月1日号の『二橋新聞』に掲載されている学生が評する「ゼミナル評判記」です。

「左右田喜一郎氏(経済哲学)はカントを通じて氏の思想の覗かれるのも今年限り」

書物の中に、何が書いてあったかはゼミナルの問題ではない。書物を読

んで、自ら何を考えたかがゼミナールの問題である。自ら考えた所を出して之をより合理的なるものに導いて貰う点に、指導の意味は存すと云う事が出来る。孔子に従って『思う』事と『学ぶ』事とを概念上分くるならば、寧ろ思わんが為めに学ぶ所にゼミナールの本質は存する。

用本には多くカントのものをを用うるが、学ぶ所は、カントの読み方である。或はカントを通じて先生の思想を悟了する事である。先生は自己の哲学体系より個々の問題に対して一貫の説明を与え給う。我等は、この問題の取り扱い方を通じて其の奥に動く先生自身のプリンジップを把持せんと努むるのである。

斯くて自己の考え思得たる最終の点が卒業論文の内容をなす。併し思惟は無限の生産過程である。考うるれば考うる程、分らなくなる事多く解決自身が既に問題を含む。従って他に見る如く報告を堆積して以て論文を作成する事は我等には到底許されざる約束がある。苦しき事は苦しけれど楽しみ又其の中にありと云う事が出来る」

一橋大学社会科学古典資料センターには、メンガー文庫と左右田文庫が収蔵されています。メンガー文庫はオーストリア学派創始者の一人カール・メンガーが収集した約2万冊からなる世界的コレクションです。実は、このコレクションを買収した資金約7万円のうち1万円は左右田家からの借入で賄っています。あまり知られていませんが、左右田には大学支援者としての一

面もあったのです。

他方、左右田文庫は、関東大震災で蔵書が全て灰燼に帰した後、亡くなるまでの僅か3年あまりのうちに蒐集した6500余冊です。増田四郎によると、「先生は一種の使命感のようなものをもって、猛烈ないきおいで、孜孜として基本的重要な文献を蒐集された」といいます。この左右田喜一郎の蔵書は、福田徳三たち3教官の斡旋で一橋大学に収められました。その内容は、カント哲学を中心とする哲学全般にわたる秀逸なコレクションであるばかりでなく、ひろく自然科学・社会科学の諸文献を含み、特に美術・芸術についての貴重書が多数含まれて、誠に壮観というばかりです。

【出所】

- 『左右田喜一郎伝』（齋藤慶司／著 有隣堂／刊 1988年発行）
- 『左右田哲学への回想』（左右田博士五十年忌記念会／編 創文社 1975年発行）
- 『大学昇格と籠城事件』（依光良馨／著 如水会／刊 1989年発行）
- 『左右田文庫目録』（1942年発行）
- 『一橋新聞』バックナンバー

※文中敬称略。

※引用中の旧仮名づかい、旧漢字は、

現代表記へと改めました。

【左右田喜一郎略年譜】

- 1881年（明治14年） 横浜に生まれる。
- 1904年（明治37年） 横浜商業学校を経て、東京高等商業学校（現一橋大学）卒業。同校で福田徳三に学ぶ。
- 卒業後英国、ドイツに留学。在独中に『貨幣と価値』『経済法則の論理的性質』を著す。
- 1913年（大正2年） 東京高等商業学校講師に就任。
- 1915年（大正4年） 家業を継ぎ左右田銀行および左右田貯蓄銀行の頭取に就任。
- 1920年（大正9年） 京都帝国大学（現京都大学）文学部講師。
- 1922年（大正11年） 横浜社会問題研究所を主宰。
- 1925年（大正14年） 貴族院議員。
- 1927年（昭和2年） 3月左右田銀行休業、一切の公職を辞す。8月11日逝去。

写真：「左右田喜一郎伝」
（1988年 齋藤慶司／著 有隣堂／刊）
からの転載
藤澤五十鈴氏所蔵





一橋大学には、ユニークでエネルギッシュな女性が豊富と評判です。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？ 第27回は、一橋大学史上初めての外国人にして女性の研究科長である国際企業戦略研究科（ICS）のクリスティーナ・アメージャン教授です。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

時を刻む女

ひと

初の来日で日本のOLを体験。
個性的な日本の企業文化に触れる

山下 アメージャン先生は、一橋大学初の女性研究科長であり、一橋大学の国際化におけるキーパーソンの一人です。そして、私生活ではお嬢さんをもつお母さん。私はメンターとして、とても尊敬しています。今日は、H Qの読者の皆さまにアメージャン先生をご紹介しながら、改めて、生き方を学ばせていただきたいと思っています。

アメージャン 少し長くなるかもしれませんが、子どもの頃からお話ししますね。私は父がアルメニア人、母がスウェーデン人の家庭で育ちました。父方の家ではアルメニア料理を食べ、アルメニアの祭日を祝い、母の実家ではスウェーデン料理を食べ、スウェーデンの祭日を祝っていました。父が両親と会話するときはアルメニア語、母も両親とはスウェーデン語で話していま



クリスティーナ・アメージャン (Christina Ahmadjian)

Harvard University, A.B. (East Asian Studies), Stanford University, MBA, University of California at Berkeley, Ph. D.

コーポレート・ガバナンス、組織間ネットワーク、日本・アジア企業のマネジメント・プラクティスに対する外資の影響、日本企業の変化について研究。

1982年三菱電機株式会社入社。1987年ペイン・アンド・カンパニー入社。1995年コロンビア大学ビジネススクール助教授。2001年一橋大学大学院国際企業戦略研究科助教授、2004年一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授、2008年一橋大学大学院国際企業戦略研究科アソシエイト・ディーン兼教授。2009年エーザイ株式会社社外取締役。2010年一橋大学大学院国際企業戦略研究科研究科長。

国際企業戦略研究科長
クリスティーナ・
アメージャン



Christina Ahmadjian

商学研究科准教授
山下裕子



Yuko Yamashita

した。でも、両親ともアメリカ生まれですから私との会話は英語でした。

山下 三つの国の文化に触れながら成長したわけですね。

アメージャン そう、クロスカルチャーな環境下で育ちましたから、大学では異文化に関わることを学びたいと思っていました。ハーバード大学で専攻を決めるとき、最初はフランス語にしようと思ったのですが、友だちに「退屈じゃない？」と言われて(笑)。結局、東アジア研究と中国語を専攻しました。中国の歴史等を学ぶなかでは当然日本に関わる部分も出てきますが、当時の私は特に日本に関心があったわけではありませんでした。でも、私がついたエズラ・ヴォーゲル教授は非常に日本に関心をもっていた人で、「日本に行って、日本経済の奇跡を理解しなさい」と勧められたのです。

山下 それで日本にいらした。日本には留学でいらしたのですか？

アメージャン いいえ、最初は大阪で英語学校の教師をしていました。その後、京都の三菱電機に勤めてOLをしました。

山下 OLですか？

アメージャン はい。女性社員と同じ制服を着て仕事をしていました。最初の仕事は灰皿当番で、社員が使っている灰皿を洗い、持ち主に配る仕事です。山のような灰皿をこの灰皿の持ち主はこの人と記憶しなければならぬのですが、これがとても難しかった(笑)。次がお茶当番で灰皿のときと同じように、この人はコーヒーでブランクなどと、一人ひとりの好みを覚えなさいといけません。また、アメリカからお客さまが来たときはわざわざ呼ばれてお茶を出しました。上司は「クリスマスは新入社員でハーバードを出たのですよ」と自慢するんですが、お客さまは笑いをこらえていましたね(笑)。あとはテレックスの翻訳など雑用が中心でした。

山下 映画の『Lost in Translation』の世界みたいですね。

アメージャン 想像もしていなかった体験ばかりでしたので、新鮮で逆に面白かった(笑)。でも、このまま働き続けても自分のキャリアにはならないと考え、帰国して大学院に入ることにしました。スタンフォード大学の入学面接で「日本でどんなことをしていたのですか？」と聞かれたときには説明に困りましたが(笑)。

NOIからバブル崩壊を経て、斜陽に。 日本企業研究から コーポレートガバナンスの道へ

山下 MBAに進もうと思ったのはなぜですか？

アメージャン 自分の体験から日本に興味をもち、日本のビジネスを研究しようと思ったからです。

山下 その当時は、アメリカでは、日本企業研究がとても盛んでしたね。

アメージャン 1980年代は「Japan as NOI」の時代でした。アメリカでは日本経済の著しい発展に関心をもつ人が多く、日本は凄い、日本が好きだと賞賛が寄せられ、日本研究をしている人は花形でした。で、MBAを修了した段階で教授から博士号の取得を勧められたのです。博士号を取得するためにはどれぐらいの期間が必要かを担当教授に尋ねたところ、5年ぐらいはかかると言われました。そのとき私はすでに29歳でしたから、5年は長いかな、と……。実際一度は博士号の道をあきらめ、コンサルティングファームに2年ほど勤務しまし



た。しかし、働いてみて改めて自分の興味は研究と教育にあることを実感しました。そして、博士課程に学ぶことを決断し、日本に関する研究では最高峰といわれたカリフォルニア大学バークレー校に行くことにしました。その時点では、5年かかってもやる価値があることなのだとの思いがありました。博士号を取得したあとは、コロンビア大学に教員として就職しました。

山下 コロンビア大学ではどんな研究をなさっていたのですか？

アメージャン コロンビア大学に就職した頃、日本のバブルが突然弾けてしまいましたが、相変わらず私は日本のビジネスの在り方に面白さを感じていました。周りからは揶揄されたりしましたが、日本の企業や経済に対する関心を失うことはありませんでした。しかしながら、少し俯瞰的に企業活動を見るのも面白いと思い、コーポレートガバナンスについての研究を開始しました。それでも、日本に行って研究をするということに関しては少し消極的でした。

山下 それはなぜですか？

アメージャン 京都にいた当時、修学旅行に来ていた子どもたちから「ガイジン」と言われたり、気安く「ハロー」と声をかけられたりしたことがあり、それが苦痛だったのです。今だったら、そんなことはないでしょうけれど。

山下 私も欧州に留学していたときは、よく「シノワ(中国人)」と子どもたちからかわれました(笑)。それでも再度、日本にいらっしやうたわけでしょう？

アメージャン ええ。阿部フェローシップの奨学金をもらい、東京大学に客員研究員として招聘されました。時代の変化もあったでしょうが、東京は住みやすい街で

したね。外国人であることを奇異の目で見られることもありませし、研究するにしても豊富な情報が容易に入手できます。

山下 ICSには、どのようにして参加されたのですか。
アメージャン ある日『ビジネスウィーク』マガジンの中に、一橋大学が新しく国際的なMBAプログラムを作るといふ記事を発見し、これこそが私が参加したいプログラムだと思つたのです。コンファレンスで前研究科長だった竹内弘高先生にお会いして、今日に至っています。

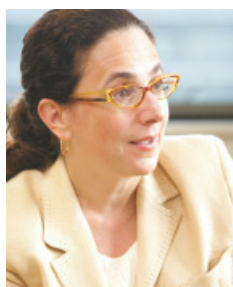
女性に完璧を目指すなくてもいい。自由に生きることがクリエイティブにつながる。

山下 東京での生活は、プライベートでも快適でしたか？
アメージャン 私は25歳で結婚し、博士号プログラム中に娘を出産しました。来日したとき娘は7歳になつていて、公立の学校に通わせたのですが、彼女もとても学校を気に入っていました。仕事もプライベートもすごく快適でした。ただし、娘の学校のPTA活動だけは戸惑いました。というのも、娘の卒業式の謝恩会の余興で親がチャリディングをするというんです。全員参加で練習は必須ということでしたが、あいにくというか、幸運にもというか、当日は海外出張が入つたため参加できませんでした(笑)。

式の当日、必死に振りを覚えて踊りました。あとでリーダーの女性から「一生懸命やつていたあなたを見て許せる気持ちになつた」と言われたことにも、また驚いてしまいました。日本のお母さんたち、アメージャン先生にも謝恩会の練習を要請したなんて、肝っ玉が据わつてますね(笑)。

いい機会ですから、女性のキャリア形成についてのアドバイスや日米の違いなどについてもお聞きしたいと思います。かつて一橋大学はとも女性が少ない大学で、その頃に卒業して社会に出た女性たちは、非常に個性が強くガッツがありました。女性の地位向上の先駆者的な役割を果たしてきたと思います。現在では社会学部の約40%が女性というように、現代の女性にとつて一橋大学に入学することは特別な選択肢ではなくなりました。しかし、女子学生たちの思考は、だんだん保守的になつてきているように思います。そんな彼女たちのキャリア意識を動機づけるにはどうしたらよいと思われませんか？

アメージャン アメリカでも、かつてはキャリアを持つ女性はワークライフバランスを取ることに難しいといわれていました。しかし冷静に対処しようと思えば、今の時代はあらゆる選択肢があるはずなのです。でも、そういうこ



とは、学校では教えてくれない。そこが問題かと思つています。
山下 日本ではキャリア教育は大学でスタートするというのが実情ですが、もつと前の中学・高校の頃から始めるべきかもしれませんね。高校の先生方のあいだでもキャリア教育への関心が高まつてきてはいますけれど、将来の国を背負つていってくれるようなエリートを育てている一流校ほど、受験の圧力が高いという矛盾がありますね。アメリカでは高校生がいろいろなサマージョブをしますね。知人の医者は、高校生

のときに、自分が本当に医学に向いているかどうかを知りたくて、病院で働いたそうです。
アメージャン 私は高校時代にバイオテクノロジーの研究者になるのかと考えたこともありましたが、若いときは自分がめざすキャリアが変わつていいと思うんです。MBAにしても多くの人は5〜6年働いてからビジネススクールに進学します。自分を再教育したり、新しいキャリアを試すことができる自由は必要だと思つています。
一つ言いたいのは、女性だからと、生きるということにことさら力む必要はないということです。働くことと家庭を持つことは、親の責任であり、そこに男女の差はないはずなんです。しかし、アメリカでも男性は、自分の主たる役割は働くことだと思つていふことが多いですし、女性は女性で自分のキャリアもある。仕事と家庭の両立を考えたとき、どちらとも、女性の負担になることが多いように思つています。
さつきお話ししたPTAの余興でもそうですが、日本

人は総じて完璧をめざす人が多いように思います。一つのことを完璧に行うだけでも大変なことなのに、例えば仕事も家事も育児も、二つも三つも完璧に行うなんて誰にもできないことなんです。私も博士課程のときは、ベビーシッターに育児を助けてもらいました。完璧をめざそうと思わなければ、できない自分を楽しめるでしょうし、工夫や活路はないかと考えるゆとりも生まれます。それでいいと思いますね。それがクリエイティブであり、ビジネスの世界でも必要なこと。完璧をめざして朝早くから夜遅くまで無理して頑張るだけでは、創造性は生まれません。

一橋を世界で有名な大学にしたい。
ICSを世界でトップランクの
ビジネススクールに育てたい

山下 ICSで教鞭を執られてから今年で10年ですね。

この10年を振り返ってみてどうですか？

アメリカン 個人としては満足できなかったこともありますが、しかし、全く無の状態から、ICSがワールドクラスのMBAへと成長する過程を見届けられたこと、またそこに貢献できたことに満足しています。国際性に富み、ビジネスのダイナミズムを実感できるICSで将来のビジネスリーダー育成に関われたことは、大変幸運なことです。

対談を終えて

HQ84

1984年、青豆が、首都高速道路の非常用階段を降りた時、クリスは、日本企業に潜入し、OLとして働いていたのである。最初の仕事は、灰皿洗いだった。部署中の男性がマイ灰皿を持っていて、それを覚えて、各人に届ける。

オフィスでの喫煙が当たり前だった日本、“Japan as No.1”という賞賛に恥ぢずかしそうにしていた日本、バブル前夜、レーガノミックスの経常黒字に当惑する日本、そして、男女雇用均等法施行前夜の日本である。本当に、1984年を境に、日本は大きく変貌したのかもしれない。

研究機関としての一橋大学の国際的プレゼンスが一挙に増大したのもこの時である。名付けて、HQ84。

神田のICSのホールに飾られたOL時代の写真の彼女はピピアン・リーのように愛くるしく、眩しい。彼女のピンナップを見て初めて、気付いたのである。ああ、我々の世界では、彼女がHQ84の時を刻んでくれたのかもしれない。

バブルの崩壊とともに、HQ暦は精彩さを失ったかのようであった。

HQ84の日本の研究者は楽だったよな～と現代の世代は、ため息をつく。日本の事例だけで重宝される。今なんて、日本のデータセットというだけで、どれだけ言い訳しなきゃいけないことか……。

そもそも、エズラ・ヴォーゲルの著作が出版されていなかったら、こんなにも「日本が日本が」と思う必要もなかったし、「失われた10年」と悔しがる必然もなく、「GDP第3位」で落胆することなどなかったはずなのである。肥大化した自己意識は、もともと外から与えられたものだったのでは？であれば、おとなしく、その記憶を消して、それ以前に意識を戻せばいい。

そんなへたれを彼女は叱咤激励し続ける。「黄金時代の一橋を取り戻さなくては！」彼女とならHQ暦に賭けてみたい。それでこそ、時を刻む女である。
(山下裕子)

山下 次につなげる、その夢はなんですか？

アメリカン 私が1980年代に日本の企業研究をしていたとき、一橋大学は研究の世界でも中心的な位置にいました。でも、バブル崩壊以降、日本企業の衰退とともに大学の知名度も落ちていきました。だから、その地位を取り戻したいと思っています。一橋大学は研究者も学生も優秀なのだから、不可能ではありません。私の夢であり使命は、ICSを今以上に進化させ、アジアの中でもトップランクのMBAプログラムにすることです。

山下 最近、昔放り出してしまった海外の学会での発表に力を入れているんです。日本のデータというだけで散々文句を言われたトラウマがあったので、相当肩に力を入れていたのですが、日本からよく来てくれたと、歓迎してくれるんです。絶滅危惧種になりつつあるみたいで(笑)。失われた10年、忘れられた日本、というのは、結局、自意識過剰だったのかもしれないと思います。特別にちやほやされるのがおかしいのであって、ただ淡々と、やることをやるべきなんだなど。一橋大学の国際的地位を取り戻すためには何が必要ですか？



アメリカン リーダーシップですね。私はICSで国際的に通用する日本のリーダーを育てる機会をもらっています。日本の学生は海外へ出るととても大人しいんです。ビジネススクールでも日本人同士で集まり、授業でもほとんど発言しません。その点、ICSはすごく恵まれた環境にあります。特に、国際経営戦略コースの授業

は英語ですし、学生の6割はアジアからの留学生です。その環境の中で、日本人は、海外に留学した場合のような「ゲスト」ではなく、「ホスト」として振る舞わないといけない。おのずとリーダーシップを取るようになりますし、授業でも英語でどんどん発言せざるを得ません。この恵まれた環境を活かしてほしいと、私は心から願っています。

One and Only One

第28話

カトリック司祭

伊藤 淳氏

司祭への道を選択せず
大手食品会社に就職

カトリック目黒アンセルモ教会は、JR山手線、東急目黒線、都営三田線、東京メトロ南北線のどの「目黒駅」からも徒歩3分の距離にある。今回の「個性」は、目黒アンセルモ教会の司祭・伊藤^{あづし}淳氏。カトリックの司祭とは、神父のことである。

伊藤さんは、1961年、神戸で生まれた。父親の転勤にともない、神戸から横浜、そして千葉県由市川に移り住んだ。中学・高校は、鎌倉にある中高一貫校の栄光学園で学んだ。同校は、カトリックのミッションスクール。伊藤さんは、ここでキリスト教（カトリック）と出会った。カトリックの教えは、少年の心に響くも



のがあった。伊藤さんが洗礼を受けたのは、1980年、一橋大学商学部1年生、19歳のときである。洗礼の地は立川教会、洗礼名は、アシジのフランシスコ。

伊藤さんが司祭になるべく神学院へ入学したのは、2004年だ。洗礼から実に24年という年月がたっていた。この24年を、伊藤さんは「長い逡巡」と表現している。ただ、その間、神学院

カトリック司祭 伊藤 淳氏の

「長い逡巡」からの脱却

へ進む機会がまっただけではなかったわけではない。

最初は、就職活動の時期を迎えた頃である。その時は、当時、多摩教会の司祭であった寺西英夫神父から「神学院に行く気はないか」と誘われた。就職という、人生の行く末に大きな影響をおよぼす選択をしなければならぬ時期である。伊藤さんは「司祭も考えた」と言う。だが、司祭（になること）「を」ではなく司祭（になること）「も」という助詞の曖昧さに、伊藤さんの逡巡ぶりが表れている。

「自分のようないい加減な人間が神父になつてはいけない。このような逡巡が強くあったのです」と伊藤さんは言う。

「逡巡」とは、ためらったり、尻込みしたり

することである。

伊藤さんは、「自分のようないい加減な人間が」と言うのだが、どんなところをいい加減と考えていたのであろう。ヒントは、以下の話の中にあるかもしれない。

「大学時代は教会活動が中心の生活でした。勉強は落第しないように抜かりなくやっていたものの、経済という分野に特別強い興味を持っていただけではありません。カトリック作家の遠藤周作さんが主催していた劇団『樹座』のメンバーとなり舞台に立つたりして、何となく楽しい日々を過ごしていたわけです」

これを「いい加減な人間」というのでは、いささか自分に厳しすぎるようにも思えるの

だが……。

「そして、就職活動の時期を迎えました。当時はバブル景気前夜にあたり（伊藤さんは1984年卒）、就職は売り手市場となっていました。映画研究会に所属し、NHKでアルバイトをやっていた私にとってもっとも興味があったのは、映像関係の仕事でした。テレビ局や広告代理店を受け、ある民放キー局から内定をもらいました。ただ、性根が据わっていませんでした。どうしてもマスコミで働くのだ、とまでは覚悟が固まっておらず、そのため業界の事情に通じた知人から内定をもらったテレビ局について『あそこはやめたほうがいい』と言われると、気持ちぐらついでしまいうり様です」



伊藤さんは、マスコミと並行して不動産、電器、化学、金融、食品などの会社も受験していた。いずれも世の中に名の通った大手企業ばかりだ。

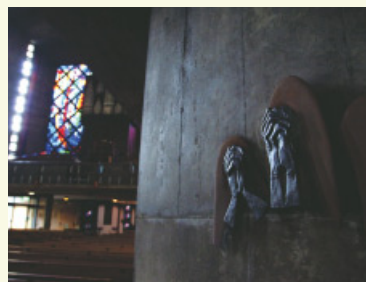
「マスコミ以外の業界には特別な関心がなく、失礼な話ですが、度胸試しとか滑り止めのつもりで会社訪問していました。マスコミの採用試験が始まると、それまでにもらっていた内定は全部断りましたが、不安だったので、マス



コミと並行してある食品会社を受け、内定をもらいました。その後、テレビ局から内定をもらったものの、迷って何人かの先輩に相談すると、十人が十人ともその食品会社を薦めました。長く社会人をしてる方々がそういうのなら間違いないだろうと思い、そこに決めました」

おそらく、伊藤さんにとって「いい加減な人間である『私』」とは、「人生を突き詰めて考えることがなかった『私』」のことを指しているのではあるまいか。だが、21〜22歳の大学生である。当時だけでなく現在も「大学生活を何となく楽しく過ごした」という人のほうが一般的である。まして「人生を突き詰めて考える」学生にいたっては、「超」がつくほどの少数派だ。加えて、世はバブルの時代に差しかり、就職先に事欠かない。

ただ、伊藤さんには、他のほとんどの学生にはない選択肢が眼前にあった。いうまでもなく、



それは「司祭への道」である。神学院へ進み司祭になるということは、よほどのことがない限り以後の生涯を聖職者としてまっとうすることを意味する。カトリックの場合、妻帯は許されない。二十歳を過ぎたばかりの青年が逡巡するのも当然といっていだらう。したがって前掲の「私」とは、「司祭になるには、いい加減な『私』」「司祭になるには、人生を突き詰めて考えることがなかった『私』」と捉えるべきかもしれない。

ビジネスに生きがいを 見いだせず教師に転職

食品会社に就職した伊藤さんは、マーケティング部門に配属された。

「課の皆さんは、自分たちが会社の屋台骨を支えている、と自負していました。ところが私は、右も左もわからないまま放りこまれたのがたまたまそこだった、という程度の認識でしたから、自負などまったくありません。自覚の足りない新入社員でした」

先輩の指導のもと、伊藤さんが最初に担当したのは、市場でトップのシェアを有する商品であった。

「その商品の市場はすでに安定していて、今後さらに拡大する余地はほとんどありません。そのため、ライバル会社とのパイの奪い合いという状況になっていました」

仕事を続けるうちに伊藤さんは、このことに疑問を感じるようになっていった。

「シェア争いに勝って自社製品の売上を増やす。もし、自社製品だけが人々に幸福をもたらす他社の製品は不幸をもたらすというのであれば、（たとえ市場が限定されていようが他社との競争が激しかりうが）張り切って仕事に取り組むことができたいでしょう。しかし私が担当した商品は内容的には他社の商品とそれほど大きな違いはなく、消費者がどちらの商品を選んでもその人の幸福とか善とか正しさとかにはまったく差がありませんでした」

ビジネスマンがライバル会社との競争に疑問を感じるようになったとしたら、どうなるか。伊藤さんは、「なぜ、こんなことに必死にならなければいけないのか。一つのパイを奪い合う。そのことに自分の人生をかける意味があるのだろうか」という疑問に行き着いたのである。伊藤さんは、ビジネスにやりがいも生きがいも見いだせなくなったのだった。

伊藤さんは、会社を辞める決心をした。そのとき、入社から3年の月日がたっていた。ここで司祭への道を選んだかというところではない。伊藤さんにはまだ逡巡があった。このことについて伊藤さんは、雑誌『カトリック生活』（ドン・ボスコ社発行）の2004年6月号に掲載された「それぞれの召命」というインタビュー記事の中で次のように記している。

「辞めて何をするかと考えたとき、司祭への道も頭に浮かびました。しかし司祭になるためには神の呼びかけが必要なのに、自分にはそ

の呼びかけは聞こえないと感じたのです。そこで、司祭に似た仕事としてカトリック系の学校の教師になって教会への「呼び込み」をやろうと考えました」

なお、各人の使命に関する神からの呼びかけ、召し出しのことを「召命」という。

伊藤さんは、社会学部に学士入学し社会科と英語科の教員資格を取得。そして、中高一貫制のあるミッションスクール（女子）に就職した。担当科目は、世界史が中心で、地理や公民も教えたという。

伊藤さんは、「呼び込み」を14年間続けた。言葉を換えれば、これも「長い逡巡」にほかならない。

「司祭への道を歩むしかない」と決心し神学院に入学

伊藤さんがいう「呼び込み」とは、教師の仕事を通じて信者ではない人に福音を伝えること。つまり、「宣教」である。だが、ミッションスクールなら生徒に信者が多く、「呼び込み」の必要はないのではないか。一般人の印象はこうであろう。しかし、実際にはそうではない。

日本のミッションスクールの場合、洗礼を受けている生徒はきわめて少ない。伊藤さんが勤務した学校も例外ではなく、洗礼を受けている生徒は、全体の5%程度だった。伊藤さんによると「それでも多いほう」とのことである。だ

が、ミッションスクールではカトリックについて学ぶ授業も行われるから、生徒には信仰に関する下地ができています。これなら「呼び込み」



も成果をもたらしてくれるであろう。

前述の「それぞれの召命」に次のような記述がある。

「教師の仕事をとおして、時には福音宣教の喜びを感じることもありました。私は宗教科の担当ではありませんでしたが、歴史の授業や課外活動、果てはソフトボール部の部活動まで、あらゆるチャンスを使ってイエスについて伝え、小さな人々*とともにいる機会をつくりました。多くの生徒はそれらを素直に受け入れてくれ、なかには神の招きに応え、洗礼の恵みにあずかった者もいました」

「呼び込み」により「洗礼の恵みにあずかった者（生徒）もいました」ということだから、伊藤さんの努力は決して無駄ではなかったわけ

だ。しかし、伊藤さんは、14年の勤務をへて学校を辞め、教師も辞めたのである。学校と教師を辞めた理由は、二つある。

一つは、学校が受験実績ばかりを問題にするようになり、本来のミッションをないがしろにするようになったこと。

もう一つは、「呼び込み」に対する疑問であった。

「教師の仕事をとおして「呼び込み」を行う。私はこれを神父に似た行為だと考えていました。しかしそれは、あくまでも似て非なるものであることを知りました。似たものは、決して本物ではなかったのです」

教師を続けることに限界を感じていた伊藤さんは、講演のために来校した旧友の晴佐久昌英神父に相談した。晴佐久神父は伊藤さんに、「もう、外で「呼び込み」をするのは終わりにして、中に入っては」と促した。

伊藤さんが司祭になる決心をした際、その背中を押してくれた人は、晴佐久神父をはじめ何人もいるが、大木章次郎神父の影響も少なくなかった。

大木神父は、ネパールのポカラで障害児のための学校をつくり、何十年も運営してきた方である。学校を辞めた伊藤さんは、ポカラに大木神父を訪ねた。2003年の秋のことだ。

「ポカラの街は湖のほとりにあり、すぐ近くにヒマラヤがそびえるとても美しいところでした。ある日、めずらしく湖畔の食堂まで夕食を

* 弱い立場におかれている人々のこと

食べに出たとき、ビールを酌み交わしながら大木神父様は『とにかく人とかかわる仕事だけは続けなさい』とおっしゃったのです」

大木神父は教育者でもあり、広島学院や栄光学園で教壇に立っていた頃から「他人の幸せに尽くす人たれ」と教え、また、ポカラでそれを実践してきた。その大木神父から「人とかかわる仕事を続けなさい」と言われたのである。

「司祭職を意識しながらなったカトリック学校教師だったので、それを辞めたとなれば、あとは神父になる以外に道はない、と決心しました」

帰国した伊藤さんは、翌2004年4月、司祭になるため「東京カトリック神学院」に入學した。洗礼を受けて24年、進路に迷いつつ企業への就職を選択してから20年がたっていた。

「長い、長い逡巡」からの脱却である。

司祭として 目黒アンセルモ教会に赴任

カトリックの司祭は、大きく「修道司祭」と「教区司祭」に分かれる。伊藤さんが入學した東京カトリック神学院は、教区司祭養成を目的としている。

2009年、東京カトリック神学院と福岡サン・スルピス大神学院の合同により「日本カトリック神学院」が開校された。伊藤さんは、その第1回卒業生だ。養成期間は6年（哲学2年、神学4年）である。

「カトリックでは、世界中を教区という行政区分に区割りしています。その教区の長が司

教。司教の手足となって教区内で司牧にあたるのが教区司祭です」

司祭が教会を運営し信徒を指導することを「司牧」という。

神学生は20代、30代が中心で、伊藤さんのように40代で神学院に入學したケースはあまり多くない。しかしこの年齢の差は、「神学生・伊藤淳」にとって決してマイナスではなかった。

日本カトリック神学院が設けている「入學志願者の資格」のトップに、「生涯、司祭として自分をささげる決意をもっていること」という一項が挙げられている。部外者からすると「君は神一筋に生きる覚悟はできているのか」と問われているかのようである。そして、若い神学生の中には、入学後、司祭として歩む人生に迷いを感じ辞めてしまう人もいるという。それほど、この一項は重い。では、伊藤さんはどうだったのか。

「私は20年も俗世間で迷い、悩み、逡巡した結果『この道しかない』というところにとどり着きました。若い神学生が神学院の中で悩むことを、私はすでに外で経験してきていますので、在学中に迷ったことは一度もありませんでした」

神学院で学び、司祭になり、教区司祭の使命をまっとうする。伊藤さんは、神学院への入学後、その意志がますます固くなったという。

伊藤さんは神学院の6年間について、「神学は、やればやるほど面白かった。勉強すること



2010年3月7日司祭叙階式



が将来司祭職に役立つ、という感じよりも、単純に一人のキリスト者として、自分の信仰がどんなに深くなり変わっていく実感がありアルタイムでありました。神様って本当にすごいですよ」と言う。

入学から5年後の2009年3月15日、助祭叙階。翌2010年3月7日、司祭叙階。神学院修了後、東京教区のカトリック目黒アンセルモ教会に赴任。住まいは教会内の宿舎である。

現在、伊藤神父は、日曜日のミサ（4回中2回）を執り行うほか、結婚式や葬儀の司式、教会運営のための各種委員会活動、信徒や洗礼志願者のための勉強会、さらにはカルチャースクールでの聖書入門講座の講師……と日々多忙であり、決まった休日はない。

一橋大学のこと 阿部先生のこと

伊藤神父は、社会学部の阿部謹也ゼミに所属していた。研究テーマは、「アイルランド中世初期のキリスト教」というものだ。

のちに学長も務めた阿部教授は、ヨーロッパ中世史、とりわけドイツ中世史の研究では日本の泰斗である。その著書『ハーメルンの笛吹き男 伝説とその世界』（平凡社）は、ドイツ中

世史に暗い人間にも刺激的な内容で、研究書という枠を超えてとにかく面白い。

「阿部先生は大変に懐の深い方で、ヨーロッパ中世史のゼミなのに何を研究してもよいとおっしゃっていました。こうしたことから、ゼミのメンバーもバラエティに富んでおり、その人間同士のつながりは魅力的で、今でも先輩、後輩を含め付き合いが続いています」

バラエティとは「型にはめない」ということだ。この「型にはめない」は、阿部ゼミにとどまらず、一橋大学の校風の一面を表している。

「一橋出身の現役カトリック司祭は、私が知っているだけでも4人はいます。2007年に亡くなった濱尾文郎枢機卿も一橋でした。また、卒業後、医学部に入りなおした友人も少なくありません。司法試験を

受けて法曹界で活躍している人も大勢いる。私は教員免許を取るため社会学部に学士入学したのですが、同じように再入学した同級生の中には、教員免許を取るため銀行を辞めてきた人もいました。こうした『本気で教員を目指す』という人が周りに何人もいました」

「学生を型にはめない」という大学は一橋だけではないだろうが、伊藤神父によると「一橋の

場合、阿部ゼミがそうであったように、それを応援しようという雰囲気があります」とのことだ。その阿部先生について、伊藤神父からひとつのエピソードをうかがった。これを紹介することで、稿を締めくりたい。

「阿部先生は中学生のときにカトリックの洗礼を受けておられます。一時は司祭になることも考えておられたようです。その後はキリスト教から離れ、ご自分は無神論者だとおっしゃっていました。今から4年前の7月に、何人かのゼミの仲間と先生と会食した際、私が教師を辞めてカトリック司祭を目指していることをお伝えすると、『カトリックはいいですね。私も洗礼を受けたとき、なんだかわからないけれど、気持ちがスーッと、清々しくなったのを覚えてい

ますよ』と遠くを見つめながら何度もおっしゃり、さらに私に向かって、『死ぬときには、伊藤に終油の秘跡（病者の塗油の秘跡）をしてもらおうかな』とさえおっしゃったのです。冗談とも本気ともつかないおっしゃり方でしたが、私は心の奥底に何か響くものを感じてドキドキしていました。それから2か月ほどたった2006年9月4日、先生は人工透析の最中に容態が悪化し、帰らぬ人となってしまいました。あのとき先生からいただいた最後のメッセージは、司祭となった今でも私の中で静かに響き続けています」

伊藤神父は、「神は愛です」と言う。長い逡巡を経て司祭の道にたどりついた伊藤神父のまなざしは、深い愛に包まれていた。



◆伊藤 淳（いとう・あつし）

カトリック司祭。
1961年神戸生まれ。
1984年一橋大学商学部卒業。
1987年一橋大学社会学部学士入学。
1989年同学部卒業。
2004年東京カトリック神学院（2009年より日本カトリック神学院）入学。
2010年日本カトリック神学院修了。
司祭叙階。カトリック目黒アンセルモ教会に赴任。



**大学紹介テレビ番組にて、
前学長石弘光氏と松井証券社長・松井道夫氏が
大学伝統のゼミの魅力について語りました**

2010年7月18日に放送(再放送8月15日)された、BS日テレ番組「大学を知ろう」知の道しるべ」内にて、前学長石弘光氏と教え子であった松井道夫氏(松井証券株式会社代表取締役社長)が一橋大学の伝統である「ゼミ」をテーマに対談を行いました。

記事では、当日放送されたお2人の対談内容を抜粋してご紹介します。

対談

厳しくも温かい存在

卒業アルバムを見て



石 懐かしいね。君は僕のゼミの6期生だったと思うんだけど。今日の対談に備えて、ちょっと当時の名簿を見てきたら、毎年僕のゼミには10名とか12名まとまって、勉強の方はさておき、元気の良いのが集まっていたなと思うよ。

松井 そう言われると辛いのですが。当時の仲間とは今でも頻繁に会っています。

石 ゼミというのは一生の仲間を作る良い機会だからな。

松井 当時先生のゼミは、ほとんどが体育会系の学生でしたね。

石 勉強の方では、だいぶしごいたから、随分と学生生活が充実したでしょう？

松井 まあ、そうですね。

石 今社会人になって学生時代を振り返ってみて、一橋の良さというの、どこいうところだい？

松井 けっこう自由だった。そして「ゼミ」というのが一橋の一番の象徴だと思っています。一橋ゼミですね。

石 僕が入学したのは1957年だけど、当時は経済学をやるなら一橋という意識もあったし、東大や京大の経済学と比べると少人数制のゼミということで、それを求めて入ってきた。

松井 今でもゼミが中心なのでしょうか？

石 状況や雰囲気は随分変わったと思うけど。今の先生方の奥さんは、職に就いている人が多いでしょう。そうなると思えば、家族ぐるみで付き合うなんてことが難しくなる。

松井 ゼミは、一つの家族みたいな感じでしたよね。先生のお宅にも何回もお邪魔しましたし、先生の好きだった山登りなんかも一緒にしました。

松井氏が一冊の本を取り出す

石 その本は君の卒論のテーマか？

松井 これは、たまたま本箱で埃を被っていたものを取り出してきたんです。

石 3年のときのテキストです。読んであとが歴然と残っています。

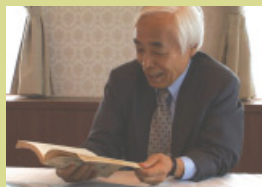


石 状況や雰囲気は随分変わったと思うけど。今の先生方の奥さんは、職に就いている人が多いでしょう。そうなると思えば、家族ぐるみで付き合うなんてことが難しくなる。

松井 内容は……石先生に言われて感じたことが、こう書いてあるんです。

「私はすっかり自信を失ったり。しかれども、我は今後、恥の上塗りをしながらでも、ずうずうしく出しゃばる覚悟をす。人生最悪の日。5月18日」結構ウブだったんですね。

これは、今でも覚えてますけど「ここから何ページまで訳せ」と先生に言われて徹夜して訳したんです。そしたら、「そんなの聞いている暇はない。もつと勉強してこい。今日は時間の無駄だから、



やり直し」と言われて。

石 僕は原書主義だったので、訳本のない原書を中心に読ませる。経済学は入学間で、欧米の学問を輸入するなかで国際人を作りたいと思っていた。原書を読ませることで、学生の外国語に対するアレルギーを払拭したかった。

松井 原書を最初から最後まで読み通すという経験は社会人になってからも、あまりないですからね。しごかれたのかなあ、と思いますけど。改めて恐怖を覚えた。それでも結局思いつくのはクラブとゼミの思い出なんです。

松井 先生がよくおっしゃっているのは「これからは海外なんだ」と。日本でちょこちょこやっているのとは違って、海外に雄飛してちゃんとやれと。

石 君なんかはそれを率先してや

パイオニアを育てたい

Captains of Industry's 神髓

つてくれた方だと思ふな。僕のゼミは財政学だったから官僚や金融業界に行く者が多かった。しかし君は、日本郵船に就職した。僕のゼミとしてはパイオニアだよ。その後奥さんと出会って、松井証券に関わることになるのだけれど。



石 新しいネット証券に着手して、まさに証券界の革命児だよ。新しいことをやるには、周りの抵抗などがあって、大変だったんじゃない？



松井 あの時と大学の雰囲気は変わったと思いますが、新たな試みも始まっているようです。石先生のあとに学長に就任された杉山さんと先日お話ししたときに、面白いことをおっしゃっていた。一橋というのは、1学年全学部合わせてせいぜい1000人ぐらいしかない。ただ世界各国から来ている留学生の比率は一番高い。これからはバークレーだ。海外から迎えて、今度は一橋の学生を外に出す。将来的には一橋の卒業要件として1年間の留学を義務付ける。

石 いうなれば、一種のイノベーションだね。うちの大学からというのと、君と楽天の三木君だよ。新しい媒体を使ってビジネスの裾野を広げたという意味では。また、証券会社というのは、銀行に比べると異質だ。君ら若手の経営者が出てきても随分イメージが変わったよ。

松井 そう言って頂けるのは嬉しいのですが、単純に言ってしまうと反権力なんですね。

石 反権力？ 君に向いているね。松井 自分で新しいものを自分の信念にそってやっていく。そういう精神が一橋の根底にあると思う。僕もそう思うよ。旧帝大といわれる東大や京大などは「官」のイメージが強い。その点、僕が一橋に来たとき感じた魅力は「民間」要素に「民」の方から日本経済を支えるという理念。そういう意味では反権力という色彩が強かった。今は、随分色彩が変わったようだけれど。

松井 当時と大学の雰囲気は変わったと思いますが、新たな試みも始まっているようです。石先生のあとに学長に就任された杉山さんと先日お話ししたときに、面白いことをおっしゃっていた。一橋というのは、1学年全学部合わせてせいぜい1000人ぐらいしかない。ただ世界各国から来ている留学生の比率は一番高い。これからはバークレーだ。海外から迎えて、今度は一橋の学生を外に出す。将来的には一橋の卒業要件として1年間の留学を義務付ける。

石 良いじゃないですか。松井 我々の時代は海外に行きたくてしょうがなかった。無理しても海外に行った。今の若い人たちは、無理しなくても当たり前に行けるから、逆に発想がドメスティックになってきている。

石 あえて苦しい留学をするのは嫌だとか、世界の最先端で頑張るのを嫌がる傾向があるように思う。自分が年を取ったせいかもしれないけれど、若者は覇気が無くなってきたように感じる。

松井 アリストテレスの時代から、今の若い者は……みたいなことはありますけれど、一橋大学というのは、伝統的に家族主義的な後輩

石 今後も一橋大学は色々な展望をもっているのでしょうか、これから先の学生に対するメッセージは？

松井 日本は元気がない、先がないなんて言われていますが、私はこんなにポテンシャルティーのある国はないと思っています。



石 僕の世代は、日本経済の発展と崩壊を見てきたわけだけれど、ポテンシャルは感じている。君の言う通りだと思う。

松井 僕は4年ぐらい前に一橋大学で講演をしました。そのときにとっても印象深い学生と出会いました。

プリザーブドフラワー…「枯れない花」の魅力

きっかけは誕生日に届いた一通の電報だった。「お誕生日おめでとう」のメッセージの入った筒とは別に、きれいな小箱が添えられていた。その箱の中の色鮮やかな贈り物、それがプリザーブドフラワーだった。電報を受け取るだけでも日頃あまりないことだったが、電報に添えて花までも贈ることができるとは知らなかった。私、私は嬉しい驚きを覚えた。そして同時に心が文字通り華やかな気分になった。この心に残る贈り物がきっかけで、私はプリザーブドフラワーの魅力に引き込まれていった。

「枯れない花」を求めて、フィールドワーク

プリザーブドフラワーとは、生花に特殊な加工を施し、美しい姿で長期間保存することができるようにしたものである。つまり本物なのに「枯れない花」なのである。水を与える必要がなく、ドライフラワーのように長く楽しめる。花の種類も、一番ポピュラーなバラに加えてカーネーション、菊、デンファレなどバリエーションもさまざまである。その上、グリーンや青のバラなど、着色によって現実にはない色合いの花をつくることができる。色合いだけでなく、花器もさまざまな形のものを選ぶことができる。このように多くの点において、プリザーブドフラワーは優れた特性をそなえている。

電報とともにプリザーブドフラワーをいただいてからというもの、その美しさに心惹かれて、今度は贈る側としてもプリザーブドフラワーに興味を持つようになった。友人の出産祝いや新築祝いなどに贈ったら喜んでもらえるはず、と考えたからである。形の残るものだからできるだけ素敵な贈り物をしたという気持ちもあって、私は休日になるとプリザーブドフラワーを調査するため、街へ「フィールドワーク」に出かけるようになった。

私のフィールドその1は、近くの花屋である。デパートや近所の専門店に出かけると、プリザーブドフラワーのウィンドウショッピングを手軽に楽しむことができる。花屋の軒先は、季節に合わせたアレンジメントで常に彩られている。例えば、母の日の



カーネーションを動物の形にしたものや、クリスマスのリースなど、定番から新作まで一つ一つ工夫を凝らした商品が飾られている。ただこうした商品を見て、友人ではなく、ついつい自分自身への贈り物としてしまうことが多いのが最近の問題である。フィールドその2は、書店である。近年プリザーブドフラワーの専門誌も出版されているので、最新の色合いやデコレーションなどの流れをつかむのに専門誌はもってこいである。投稿作品やQ&Aコーナーなども掲載されていて、観賞だけでなく制作も手がける熱心な読者が多いことがうかがえる。しかしこれらは写真が多く大型の雑誌であるため、重くてあまり長時間の立ち読みには向かないのが残念である。

「枯れない花」のような生き方

こうした趣味の「フィールドワーク」から見えてきたのは、プリザーブドフラワーは男性よりもやはり女性のファンやデザイナーが多いということである。花屋でも書店でも、プリザーブドフラワーの周りには女性が集まっている。それにしても私を含めて、多くの女性がプリザーブドフラワーにひきつけられるのはなぜなのだろうか？ 維持管理の簡便さ、あるいは多様なバリエーションの魅力だろうか？ 確かに、こうした特性は忙しい現代の女性たちの手間を省いたりストレスを減らしたりするのに効果があるだろう。しかし私が思うプリザーブドフラワーの最大の魅力は、それが「枯れない花」である、という点である。すなわち、いつまでも生き生きと美しく「枯れない」生き方をしていきたい、という女性たちの願いが、このプリザーブドフラワーの姿に投影されているのではないか、そんな気がするのである。

あのプリザーブドフラワーが私のところに電報とともに届いてからすでに3年が経った。今も3年前と変わらない鮮やかさを保っている。私もこの花のように「枯れない」心の若さをもって年齢を重ねていきたいものである。

Love of Culture

プリザーブドフラワー



法学研究科講師

高濱 愛

音楽趣味の垂直統合

経営学には「垂直統合」（開発から生産、販売に至る業務の流れを一貫して自社で手がける）とか「水平分業」（特定の機能に業務を専門化して、それ以外の分野は外注したり外部の企業と連携する）という言葉がある。パソコン業界などでは水平分業が一般的だが、アパレル業界では垂直統合的なやり方をしている企業の方がこのところ強い（その代表がファーストリテイリングのユニクロ）。

……というような話はこの際どうでもよくて、音楽の話です。子供のころから音楽を聴いたり歌ったり踊ったり飛び跳ねたりするのがスキでスキで、そのまま現在に至るのですが、水平分業的に音楽を楽しむ人もいれば、垂直統合モデルを追求する人もいます。

僕はといえば完全に垂直統合派。どういうことかと言いますと、まず音楽を聴く。僕がスキなのは軽音楽で、ロック（70年代中心）とかR&Bを好んで聴きます。僕は小さいころアフリカで育ったのですが（70年代前半）、当時は周囲にいた黒人の人々がやたらにモータウン（The SupremesとかThe TemptationsとかStevie Wonderとか）を聴いては踊りまくっていた（このノリが凄かった！）こともあり、軽音楽のビートの楽しさ、とりわけ後ノリというかアップビートのかっこよさにすっかりやられてしまいました。

普段はiPodとかでちゃらちゃらと聴くこともありますが、これはという曲は自宅のオーディオ装置の前でしっかりと聴きます。オーディオ再生装置にも相当の無駄遣いを投入しているのでわりとイイ音。とりわけスピーカーはウエストレイク・オーディオという会社のLC-3W10VFというマニアックなのを

使っております。で、気持ち良くなる。気持ち良くなると必ずといっていいほど踊りたくなる。で、踊る。で、すっかり楽しくなる。

すっかり楽しくなると自分で演奏したくなる。で、曲に合わせて弾いてみる（僕はエレクトリック・ベースという楽器をやる）。で、ますます楽しくなる。

自宅で一人で弾いているのもわりとさびしいので、バンドでやってみる（この二十数年Bluedogsというロックバンドをやっている）。で、スタジオでデカイ音でやるといよいよ気持ち良くなる。

いよいよ気持ち良くなると人にも聴かせたくなる。で、ライブをやる（Bluedogsは渋谷のライブハウスでやっています。知り合いの方々に無理やり聴きに来てもらうという、これがまたわりと迷惑な話）。ステージで演奏すると興奮する。興奮して汗とかヨダレとか涙とか、さまざまな水分が体から出ていく。水分を放出すると、その曲がますますスキになる。

ますますスキになるとレコーディングしたくなる。で、エンジニアを雇ってスタジオにこもり、レコーディングする（現代ではデジタル・レコーディングなのでスカットできる）。レコーディングした音源を、自分が聴いて気持ち良くなるように（ここがポイント。オーディエンスとはとにかく自分中心の自己満足）ミキシングする。で、CDにする。

自分たちの演奏をCDにすると聴きたくなる。で、自宅のスピーカーの前で爆音で聴く。爆音で聴くと踊りたくなる。踊ると演奏したくなる。で、スタジオに行くと……（以下、延々とループ）。

ということで、これが音楽趣味の垂直統合なわけです。すべてが自己完結してぐるりぐるりと循環していくうちに音楽の感動がよどみなく深まりまくるやがるわけです。

これがプロということになるとさまざまな理由である程度水平分業しなければならないこともありますが、音楽に限らず、ものごとを素直に楽しむアマチュアリズムの精神は垂直統合に帰結するというのが僕の見解です。音楽がスキでも、聴いてるだけ観

てるだけという水平分業の方、多少なりとも垂直統合してみることをお勧めします。まずは踊るところから始めてみましょう。

ちなみに、BluedogsのライブについてはTwitterの「楠木建」フォローで、ひとつご晶屑に！



金融危機をどう考えるか

2007年春以来、サブプライムローンの焦げ付きに端を発した国際金融市場の動揺と混乱は、100年に一度の金融危機という形容をされる規模にまで拡大した。

2008年11月にロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)をエリザベス女王が訪問された際に、「こんなに大規模な金融危機なのに、どうして事前に予測できなかったのか」という異例ではあるが率直な質問をされた。それに対して、イギリスの経済学者たちは後日、「金融の専門家たちはリスクを適切に管理しており、他の人たちも皆同じように管理しているとの過信があったこと、また、個々のリスクが複合されると過大なリスクになる点を見逃していたこと、しかし、危機の収拾については全力を挙げて立ち向かっていること」などを伝えるのが精一杯であった。

ここでは、金融危機を理解する上で参考になる金融史の読み物2冊を紹介したい。

The “This-Time-Is-Different” Syndrome

Reinhart and Rogoff (2009) は、政府債務危機、銀行危機、通貨危機などの形で現れる金融危機が過去800年間に世界各国で繰り返し発生していることを統計的に示した研究書である。

本書では、金融関係者や政策当局が持ちがちな偏見をThe “This-Time-Is-Different” シンドロームと名付けて、次のように要約している。「金融危機とは他人に対して、他国で、別の時代に起こることであって、我々はそのようなへまはしない。我々は金融知識もあるし、過去の失敗からも学んでいる。過去の金融価値の評価方法は当てはまらない。現在の好景気は、過去に崩壊したバブルとはちがひ、健全な実体経済、構造改革や技術革新、そして適切な政策対応に裏づけされている」(p.15) ことを信じて疑わない心理や行動を表している。

確かに、バブルの最中であって、これ以上の金融取引は危険であると学者が警告したところで、実際に金

融関係者の暴走を初期の段階で阻止できなければ、その効果は無かったと言わざるを得ない。金融当局も市場取引が活発に行われているところに水を差すような金融引き締めを行うには、かなりの反発を予想しなければならないので、どうしても政策対応が後手に回る。こういったメカニズムが金融危機を生んでいるというのである。

金融の進化史観

Niall Ferguson (2008) も「金融史はジェットコースターのようにアップダウンし、バブルが生じてははじけ、熱狂とパニック、ショックと暴落を繰り返してきた」ことを認めつつも、基本的には「人類には科学の進歩や法の普及と同じぐらい、金融の技術革新や仲介業務や統合などの複雑なプロセスが不可欠だった」ことを強調している。

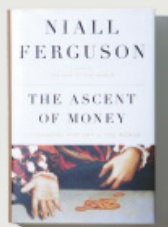
そうした中で、著者は金融危機の原因を次の3点に求めている。「第一に、未来が予測可能なリスクではなく、不確実性の領域にある点。第二に、熱狂から失意へと急変しやすい人間の本性や、過去の歴史から学べないという人間の性質。第三に、金融の進化論的性質」ということである。

著者は「金融市場は人間を映す鏡であり、私たちが自分自身や自分たちを取り巻く資源の価値をどのように評価しているかをつねに示している。人間の欠点が、美德と同じようにあからさまに映ったとしても、それは鏡のせいではない」と結んでいる。

評者はここで取り上げた2冊の本に共感するところが多いが、金融が如何に進化しようとも、金融危機を未然に防ぎ、公正な金融のあり方の指針になるのは、実体経済と金融経済のバランスにあることを再確認しておきたい。



Carmen M. Reinhart and Kenneth S. Rogoff (2009)
This Time is Different: Eight Centuries of Financial Folly
Princeton University Press.



Niall Ferguson (2008)
The Ascent of Money: A Financial History of the World
The Penguin Press.



『マネーの進化史』
ニール・ファーガソン／著
仙名紀／訳 早川書房刊
定価：2,835円（税込）
2009年12月18日発行



in Osaka

地球の風 地域の風

株式会社イムラ封筒 代表取締役社長

井村守宏氏



荷札とは全く無縁の地で、家内工業が始まった。
小さな知恵が大きな成功を生んだ



創業者井村福松は、新しい物流ルートとして急成長していた鉄道輸送に使われる荷札の将来性に注目した。

災いが運となり、創意工夫が 家内工業を事業へと発展させた

イムラ封筒は、1918年（大正7年）に荷札製造会社としてスタートしました。創業者は、私の祖父である井村福松ですが、彼は奈良県立農林高校を卒業した後、教師になりました。しかし、家業をなおざりにしがちな両親との生活には、お金がかかる為に創業を決意

イムラ封筒創業者、井村福松は実家のある奈良県の農村に荷札の製造会社を起こした。

大正、昭和の混乱期、ビジネスの適地でないことが幸いした。後発であることで、工夫と顧客至上の精神が生まれた。

逆境の先に成功がある。気がつけば封筒製造というニッチの業界で、唯一の上場企業へと育っていた。

「荷札」をその商材に選びました。きっかけは、駅に山積みにされた荷物を見たことでした。回転率の高い消費財である荷札に大きな可能性を見出し、製造を手掛ける会社を立ち上げたのです。印刷以外は、100%手作業の家内工業でした。自転車で注文を取りにいき、家に帰って荷札をつくり、出上がった荷札はまた自転車で届けにいくといった、まさに労働集約的な仕事です。しかし事業は、あることをきっかけに軌道に乗ること





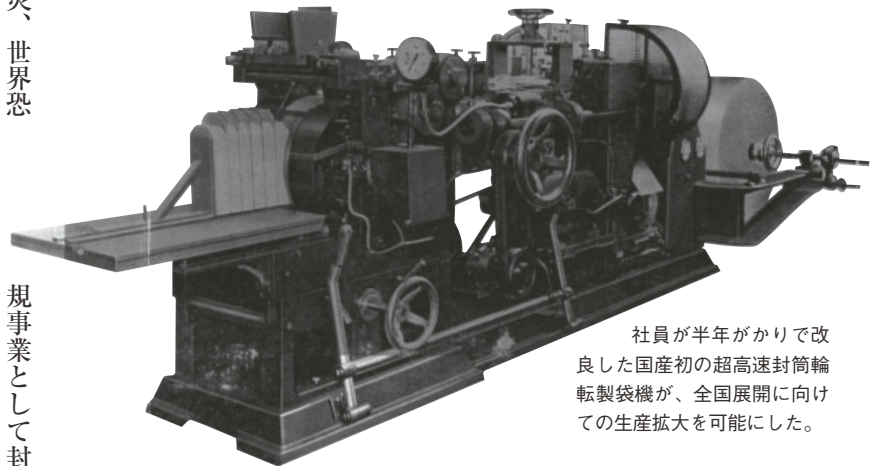
村部にある手作業の荷札製造者に、大量の注文が舞い込んできたのです。

時代が進んで昭和に入り、福松は荷札の需要低下を感じ取っていました。そして1937年（昭和12年）、新

になります。大正時代に起こった関東大震災、世界恐慌です。災害によって東京の産業インフラが停止し、仕事の場合、関西へとシフトしていきました。また、既にグローバル化しつつあった東京は、世界恐慌の影響を強く受けていましたが、関西は東京ほどではなかったようです。創業者の営業努力のいかにもあり、奈良県の農

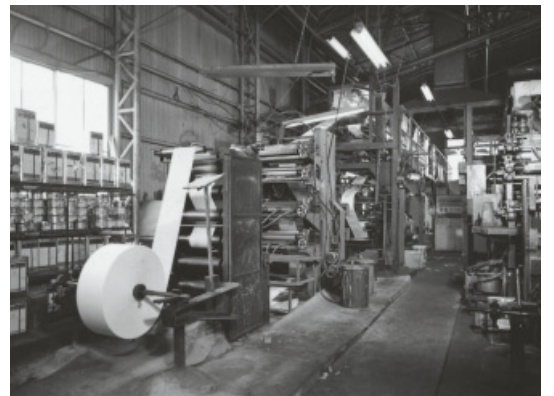


1936年（昭和11年）、日産10万枚の新鋭機を導入し、封筒の大量生産にふみぎった。当時大手メーカーが力を入れていなかった事務用封筒の生産に重点をおいた。



社員が半年がかりで改良した国産初の超高速封筒輪転製袋機が、全国展開に向けての生産拡大を可能にした。

規事業として封筒の製造に着手したのです。封筒をつくる過程において福松は、偶然にも荷札の改良を思いつきます。荷札の針金を通す穴を1つから3つ穴に改良し、封筒製造の際に出た切れ端を補強材として使用し、より丈夫な荷札をつくったのです。これがヒットしました。ローテクではありますが、イノベーションということになるでしょう。また戦時中は、将来の物資不足を予測し、荷札の用紙と針金を備蓄していました。いかなる状況下でも、お得意様への責任だけは、果たしたいという思いがあったそうです。これは今でいうところの、顧客本意主義にあたるのではないのでしょうか。こうした企業努力もあり、弊社は戦後においても比較的早く復興できました。また、会社



各種通知書やDMに多用される透明窓、「プラマド」は、イムラ封筒の登録商標。輪転プラマド製袋機は、東京市場の開拓に力を発揮した。

も奈良県の農村部という立地条件が幸いして、ほとんど被害を受けていなかったのです。

後発というハンデを乗り越えて

しかしながら受注が増え企業規模が大きくなる過程において弊社は市場の壁にぶつかることになりました。封筒メーカーとしては後発企業であるがゆえに、様々なマイナスイタ要素がありました。その一つが、販売ネットワークがないことです。業界内では、封筒製造の受注は印刷会社からのルートが柱になるのが一般的でしたが、後発の弊社にはそのルートがない。自ら販路を開拓しなければなりません。業界としては極めて珍しい、直販体制をとらざるを得なかったのです。



プラマド付き封筒の製造から、郵便物の封入、宛名印字、発送、顧客データ管理に至るまでを行うメーリングサービスを実施している。



しかし、この直販体制こそが弊社成長の礎を築くことになったのです。顧客と直に接することで、細かいニーズを把握することができました。前例や慣習にとらわれることなく、自由に新しいモノをつくらうという風土が育まれたのです。現在、弊社の販売実績のうち、50%強が直販によるものです。印刷会社や他の販売ルートを通しての依頼ももちろんありますが、大阪・東京の営業は原則として直販体制で行っています。生きるためにやらざるを得なかった直販営業が、結果として弊社のコンサルティング力やヒアリング力、営業力へとつながっていったのです。

そして成功のもう一つの要因として挙げられるのが、自社開発力でした。封筒の製造工程は、平判原紙を切って、型を抜き、貼りつけるという単純な3つの作業しかないため、従来大量生産に対応する機械はありませんでした。弊社では巻取原紙から全工程を一貫して行える機械を求めてメーカーに製造を依頼しました。しかし、結局満足できる機械はできませんでした。仕方なくその未完成の機械を引き取り、自社にて機械の改良を試みたのです。弊社に機械に強い技術者がいたのが幸いし、機械を完成品として仕上げることができました。この自社開発の機械は、大量生産を可能にし、同時に製造コストの削減を実現しました。こう

した技術力、商品開発力が顧客対応力、提案力へとつながっていったのです。

ボートで知った一橋

イムラ封筒という会社は、創業時の井村商会という商号から井村荷札封筒という社名を経て、1962年（昭和37年）から現在の社名になりました。経営者も、創業者である祖父の後、父、伯父の娘婿と3代続き、私は4代目となります。子供の頃から家業継承の意識はありましたが、そのことと一橋大学への進学に関連はありません。私が最初に「一橋」という言葉を聞いたのは子供の頃でした。大学対抗のボート競技を見て、そこで一橋大学の名を初めて聞きました。ヒトツバシという響きに「変わった名前前の学校やな」と興味を持ったんです（笑）。

その後高校1年生のときに、旺文社の『螢雪時代』を見て「一橋」の文字を発見し、子供の頃の記憶が蘇ってきました。その

記事では、ゼミが盛んであること、先生と学生の距離が近いこと、こぢんまりとした学校という表現で紹介されていました。それを読んで、「あ、この学校ええな。行きたいな」と直感的に思い、入学を目指し受験勉強に励んだのです。

入学して感じたのは、一橋は同窓会の結束が固いというところ。その独特な風土は、私に通っていた奈良県立畝傍高校と似ていて、早い段階から大学に親近感を持つようになったことを覚えています。

刺激、個性、自由がそこにあつた

当時は学生運動が盛んな時代でした。キャンパスだけでなく、下宿先にもいろいろなタイプの人間がいて、連日「アンチテーゼ」がどうしたとか「資本主義」が





1964年（昭和39年）より東京向けの生産拠点として稼働してきた相模原工場。写真は1997年（平成9年）に完成した新工場。



旧本社事務所。

どうだとか、本当にまとまらない話を延々議論していただきました。私は毎回、あえて相手を敵に回して「資本主義が絶対勝つ」という論陣を張っていました。当時を振り返ってみると、そうした本気の議論ができたあの時代は、今さらながら幸せだったと思います。今の学生がどんな議論を楽しんでいるのかは想像すら及びませんが、いずれにしても様々な価値観に触れることは、自己を確立するうえでとても大切なプロセスだと思います。私の場合、自分よりも明らかに優れていると思う同級生が数多くいましたし、そういう人間と出会えたことが、今でも私の財産になっています。

中堅・中小企業は、 フロンティアスピリットを求めている

大学を卒業して、日本経営システムの紹介で3年間ミドリ安全で働きました。その後イムラ封筒に入社したわけですが、最初に担当したのが原価管理という仕事でした。工場と営業の間に入って、原価を元に販売価格を決定する仕事なのですが、そこで初めて『原価計算原論』という本を読み込みました。学生時代はほとんど関心を示さなかったのに（笑）。改めて学んでみると、原価管理の仕事は非常に面白いものでした。その後、営業部署へと異動して、東京で顧客開拓を担当しましたが、その仕事もやりがいのあるものだったと思います。

私の体験から言えるのは、中堅・中小企業だからこそ味わえる手応えがあるということです。一橋大学の場合、学生の就職先は大企業がほとんどです。もちろん大企業のビジネススクールは、何百億、何千億という大きなものになるので、単位としてのダイナミズム

はあります。しかし、仕事の規模が大きくなればなるほど、一人の人間が担当できる範囲は限られてきます。一方、中堅企業であれば、規模は小さくなりますが主軸として活躍できる可能性があります。私が一橋大学に望むことは、中堅・中小企業で働く魅力についても学生に伝えてほしいということです。ないものは自分でつくる、できないことをできるようにする、中堅・中小企業こそが、そういったフロンティアスピリットを最も必要としているからです。



◆井村守宏（いむら・もりひろ）

1947年生まれ、奈良県立畝傍高校出身。1972年一橋大学商学部卒業後、ミドリ安全株式会社に入社、1974年同社退社。1975年株式会社イムラ封筒入社。1979年4月同社取締役営業部長代理、8月取締役製造部長、1983年常務取締役製造部長、1987年専務取締役、2003年代表取締役社長に就任、現在に至る。



今年も3,000人を超える高校生や保護者が、 オープンキャンパスに参加しました



夏の恒例行事となったオープンキャンパスを2010年も8月5日に開催しました。

大学紹介、学部説明、学生による学生生活相談コーナーやキャンパスツアー、受験生相談会など、盛りだくさんのプログラムを用意し、3,000人を超える高校生や保護者を迎えました。

午前、午後の2部構成

一橋大学のオープンキャンパスは、キャンパスの大きさや大教室の数に限りがあるため、午前、午後の2部構成で開催しました。プログラムはまず、兼松講堂にて杉山学長の挨拶から始まり、続いて盛副学長から大学概要説明がありました。

学部説明

兼松講堂を出た高校生たちが向かうのは、各学部が開催する学部説明の会場です。模擬授業や学生によるパネルディスカッション、学部説明用のビデオ上映など、各学部が趣向を凝らして学部を紹介しました。学部に関する個別質問も実施されました。

学生によるサービス

オープンキャンパスでは、在学生も活躍します。学内を案内するキャンパスツアーや受験生相談会は学生が主体となって開催しました。また、大学に來られなかった高校生や当日聞き忘れたことがある高校生に対して、一橋祭運営委員会が左記の一橋祭ホームページ内に受験生応援ページを設け、インターネットを通じて高校生の質問に答えています。

<http://www.ikyosai.com/>



当日オープンキャンパスに参加できなかった方へ

映像配信

オープンキャンパスの様子をWebサイトにて映像配信しています。

キャンパス見学

個人でキャンパス内を見学されたい方は、建物への入館はできませんが、事前申し込みなく自由にキャンパス内を見学できます。また大学案内は、守衛所又は学生受入課にて入手できます。(平日9:00~17:00)

詳しくは右記のURLをご参照ください。 http://www.hit-u.ac.jp/admission/entry_guide/opencampus/index.html

在学生の保護者・在学生

8名 (670,000円)

有村一郎 様
岩船真人 様
遠藤 博 様
押久保政樹 様
鈴木公典 様
服部高尋 様
他2名

卒業生のご家族・一般の方

4名 (55,100,000円)

天野明夫 様
小林アヤ子 様
荒川三枝子 様
他1名

企業・法人等

10団体 (8,500,000円)

株式会社アトックス 様
オフィス赤谷株式会社 様
株式会社コトブキ 様
株式会社J.M 様
株式会社ダイヤモンド・ビッグ&リード 様
タナカ塗装株式会社 様
ティ・エス・ケイ株式会社 様
長谷川体育施設株式会社 関東支店 様
株式会社ビル代行 様
株式会社プリンスホビー 様

本学役職員

25名 (3,062,000円)

佐藤 修	様	芹沢宗一郎	様	鶴巻 暁	様	花田信彦	様	松井 浩	様	山口昭一	様
佐藤繁男	様	善住義和	様	寺田恭典	様	馬場 昭	様	松井嘉則	様	山口 猛	様
佐藤正治	様	曾我隆二	様	遠山興一	様	馬場信三	様	松浦 明	様	山口仁史	様
佐藤秀明	様	曾我隆二	様	鶴田圭史	様	濱浦 清	様	松江勇吉	様	山崎耕一	様
佐藤 均	様	曾根健孝	様	登坂秀峰	様	林 かおり	様	松尾弘人	様	山崎昌三郎	様
佐藤隆介	様	園田一精	様	戸松 宏	様	林 一夫	様	松崎澄義	様	山崎 進	様
眞田幸男	様	田尾孝太郎	様	富井 元	様	林 俊行	様	松澤 正	様	山崎俊男	様
澤崎満男	様	高井龍彦	様	富田昭平	様	林 信行	様	松田健志	様	山崎寛也	様
澤村 裕	様	高井 豊	様	内藤雅和	様	羽山章一	様	松田 智	様	山下国雄	様
山東裕美	様	高岡慶四郎	様	中井順一	様	原 博貞	様	松田 博	様	山下直樹	様
塩川明男	様	高木照大	様	長澤 昭	様	原田芳光	様	松原 寛	様	山田和子	様
篠田紘明	様	高木悦明	様	中島 聡	様	春川裕宏	様	松村隆志	様	山田計介	様
柴本泰宏	様	高桑 豊	様	中島靖之	様	半田正雄	様	松本五良策	様	山田高生	様
渋谷武夫	様	高崎祐輔	様	中條祐介	様	樋口明男	様	松本 正	様	山田孝行	様
嶋 巖	様	高嶋和美	様	永瀬正治	様	樋口久雄	様	松本哲明	様	山田高章	様
島 達浩	様	高橋 繁	様	中田久志	様	日暮康之	様	松本正幸	様	山田雅之	様
島田浩一郎	様	高橋 毅	様	中田裕之	様	久松圭文	様	松山啓哲	様	山田雅義	様
島田秀一	様	高橋哲彦	様	仲田 忠	様	平井一樹	様	松山博久	様	山田幸徳	様
島田弘道	様	高橋 通	様	永田 光	様	平賀茂孝	様	松山雅胤	様	山田幸正	様
島村利則	様	高橋治範	様	中谷亮太	様	平田貴彦	様	丸山和宏	様	山中禎夫	様
清水一男	様	高橋靖夫	様	中野重幸	様	平田雅彦	様	丸山憲治	様	山埜茂樹	様
下澤伸介	様	高橋良多	様	仲野恒恭	様	平竹善次郎	様	丸山正之	様	山村 孝	様
下平龍平	様	高間伯夫	様	中野賢行	様	平野和俊	様	三浦 勝	様	山本 継	様
寿福未来	様	高見沢昌彦	様	中牟田研市	様	平原重利	様	三上 哲	様	油井雄二	様
荘 雅行	様	高森啓滋	様	中村敦夫	様	廣澤昌輝	様	三上光雅	様	遊佐伸彦	様
白井和彦	様	滝島守夫	様	中村家久	様	廣瀬 進	様	三瓶晴康	様	湯澤誠章	様
白井和之	様	瀧本峰男	様	中村克己	様	深町昌彦	様	三木隆二郎	様	楊 超雄	様
白井浩司	様	田口貴弘	様	中村光伸	様	深谷 進	様	神子田基博	様	横尾 優	様
白石英一	様	田口 実	様	中村博司	様	深谷光茂	様	水越芳信	様	横田勝介	様
白石欣三郎	様	武井 淳	様	中村博之	様	福島紀美夫	様	水野隆光	様	横田希代子	様
城田峰生	様	武内邦信	様	中村正己	様	福島清四郎	様	溝口球子	様	横堀喜一郎	様
新保 智	様	竹内敏男	様	中村 稔	様	福田 勇	様	三谷正夫	様	横山雅文	様
未延幸辰	様	竹内伸行	様	中村佳央	様	福田俊一	様	三橋秀方	様	吉井一真	様
菅井雅昭	様	武田恒雄	様	中村龍太郎	様	福田潤弥	様	光山亨治	様	吉岡建夫	様
菅谷信雄	様	武田晴雄	様	中山直子	様	福田達夫	様	南 大造	様	吉沢哲生	様
杉浦由和	様	武久 裕	様	新雲和利	様	福田寛之	様	南塚 優	様	吉沢裕樹	様
杉本伸之	様	田嶋正信	様	那須維昭	様	藤井大輔	様	三原朝彦	様	吉田憲一郎	様
杉本 学	様	田代哲也	様	名取光広	様	藤井雅博	様	三宅秀夫	様	吉田泰彦	様
勝呂裕二	様	田中長雄	様	新川 学	様	藤井雅義	様	宮田 勇	様	吉田幸夫	様
助川信一	様	田中克己	様	新倉和夫	様	藤岡澄人	様	宮原一代	様	吉野彰志郎	様
菅生健史	様	田中秀夫	様	新村邦彦	様	藤田精一	様	宮原真一	様	吉本清志	様
鈴木 淳	様	田中英雄	様	西垣内靖子	様	藤本 隆	様	宮村忠司	様	米井忠生	様
鈴木喜一郎	様	田中宏昌	様	西川敏明	様	藤森恒雄	様	三好 毅	様	米倉一良	様
鈴木吾朗	様	田中正昭	様	西川昌宏	様	藤原一朗	様	みよ子	様	米田徳夫	様
鈴木省三	様	田邊昌良	様	西崎進三	様	古川和正	様	三好啓司	様	若尾 靖	様
鈴木孝男	様	谷川昌隆	様	西嶋健治	様	古田公一	様	三輪 聡	様	若菜重一	様
鈴木恭之	様	田沼浩之	様	西野史尚	様	古田正信	様	村 達男	様	若林照二	様
鈴木竹夫	様	田林宏章	様	西野 実	様	古谷磐根	様	村上永一	様	若日田宏三	様
鈴木武文	様	田原賢明	様	西原勝太郎	様	古谷九八郎	様	村瀬 寛	様	若山正彦	様
鈴木 徹	様	玉川越三	様	西村達哉	様	古屋元伸	様	村田 大郎	様	和田規文	様
鈴木俊樹	様	溜箭隆司	様	西山修二	様	瓶子 眞	様	村田 宏	様	渡辺 恵	様
鈴木智子	様	田村晶彦	様	西山修二	様	逸見和宏	様	村田眞昭	様	渡辺淳平	様
鈴木弘之	様	田村朋之	様	仁平 忠	様	星崎功明	様	村田康一	様	渡辺 仁	様
鈴木 誠	様	為永和博	様	斐谷 裕	様	星野茂夫	様	室井興起	様	渡邊 孝	様
鈴木義雄	様	千葉博彦	様	貫井清一郎	様	細井五郎	様	目黒修二	様	渡邊太郎	様
鈴木善堯	様	塚田浩史	様	沼口理作	様	細野 徹	様	目羅輝和	様	渡辺哲也	様
須藤尚彦	様	塚本章人	様	根崎修一	様	穂積洋一郎	様	最上 徹	様	渡辺直美	様
住友昭夫	様	塚本迪三	様	苗加 隆	様	堀 慎一	様	茂木俊明	様	渡辺 裕	様
陶山 浩	様	辻 清隆	様	野川 清	様	堀 隆之	様	森 泰助	様	綿引 充	様
諏訪部正彦	様	辻村大喜雄	様	野間春海	様	堀江 隆	様	森 洋治	様	龍の会(増淵龍夫ゼミ)有志一同	様
瀬川 篤	様	津田樹己	様	野村正博	様	堀木幹夫	様	森田 鏡	様	山澤逸平ゼミ会	様
関 浩暢	様	津田朋彦	様	橋本哲次	様	本多 功	様	森本啓介	様	昭和37年 悠々会	様
関 正利	様	堤 哲児	様	連沼昭男	様	本多伸次	様	八木政幸	様	如水会川崎北支部	様
関口敏三郎	様	角田憲司	様	長谷川治雄	様	本多永正	様	八木美紀子	様	如水会名古屋支部	様
関根雅志	様	壺屋修平	様	長谷高 謙	様	本間要一郎	様	矢澤 徹	様	りそなグループ有志一同	様
関本洋輔	様	津曲 靖	様	畑 威	様	前田 新	様	矢代弥六	様	他104名	様
関谷 純	様	鶴 一郎	様	服部和夫	様	増田広和	様	矢田清明	様		
世古洋介	様	鶴 邦彦	様	服部 壮	様	町田晶生	様	柳川克己	様		
瀬島史郎	様	鶴 護	様	花田一憲	様	町田耕一	様	山岡道昌	様		
妹尾有己男	様	鶴田雅男	様	花田翔平	様	松井 順	様	山川信彦	様		

一橋大学基金へのご協力、心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2010年8月末現在で、総額約30億6,000万円（入金済分）に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2010年6月1日から2010年8月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役員につきまは掲載していません。また、ご寄付者で万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に関しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。



なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みについて

●お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

●一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申込み」メニューからお進みください。一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

如水会会員証カードをお持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では（社）如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回（2月または8月）と年2回（2月および8月）よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局
〒186-8601 東京都国立市中2-1
TEL：042-580-8888
FAX：042-580-8889
E-mail：gen-kj.g@dm.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

846名・8団体（111,775,673円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上	50万円以上 100万円未満	50万円未満
34名	20名・2団体	792名・6団体
相原 稔 様 青葉孝時 様 新井 実 様 池田 壘 様 稲次哲郎 様 伊与部恒雄 様 榎戸 勇 様 奥村一郎 様 尾崎敏絃 様 小高英紀 様 加藤龍雄 様 兼子春三 様 亀田 清 様 岸本 敏 様 高木重知 様 高橋治朗 様 高橋誠一 様 高橋俊夫 様 竹内誠一・竹内和男 様 中居絃一 様 桥本守生 様 町田秀春 様 松井道夫 様 松本正義 様 丸子博之 様 森川莫臣 様 森田英二 様 吉原隆司 様 吉村尚憲 様 渡邊 彰 様 渡辺俊一 様 他3名	青木雅宏 様 市川康夫 様 大澤俊夫 様 奥山富夫 様 藤山真人 様 北川三雄 様 倉田隆之 様 國府 諭 様 柴崎晃一 様 神藤浩明 様 鈴木輝彦 様 高野直人 様 中村敬太郎 様 中森 徹 様 端山 靖 様 平田省三 様 増田誠一 様 山下正二 様 山下輝男 様 山田利夫 様 一橋三八会 様 大学基金支援会 様 株式会社ふくおか フィナンシャルグループ 如水会 様	相沢剛彦 様 相原大介 様 青木 昭 様 青木英司 様 青木克規 様 青野勝之 様 青柳茂夫 様 青山浩司 様 赤尾洋昭 様 赤熊善行 様 浅井辰彦 様 浅野 勉 様 網代隆介 様 内藤輝清 様 足達明聖 様 厚見 収 様 阿部源次郎 様 阿部 博 様 新井 陽 様 新井 靖 様 荒木宣夫 様 有明秀太郎 様 有坂三郎 様 庵木孝公 様 飯島 満 様 飯塚清彦 様 飯室信一 様 井口秀作 様 池内 章 様 池田信彦 様 池田雅英 様 井澤章二 様 石井 徹 様 石井昌司 様 石井勝博 様 石垣 勲 様 石上栄一 様 石川越夫 様 石川信夫 様 石黒達郎 様 石下志郎 様 石島浩一 様 石田 章 様 石田政明 様 石橋一雄 様 石橋寛一 様 石島康充 様 石平厚一郎 様 磯崎栄一 様 市川和夫 様 市川武伸 様 井土光夫 様 伊藤弘介 様 伊藤 隆 様 伊藤 寛 様 伊藤隆吉 様 稲田厚生 様 稲場秀弥 様 稲見英紀 様 稲毛尚之 様 伊野弘男 様 井上禎浩 様 井上 武 様 井上博史 様 井口 潤 様 伊富貴徹二 様 今井明良 様 今泉博勝 様 今泉俊明 様 今村 卓 様 井本喜徳 様 岩井雅司 様 岩上武夫 様 岩澤輝幸 様 上田隆夫 様 上田時裕 様 上南達郎 様 植野尚男 様 植村泰行 様 宇賀正樹 様 宇佐見博志 様 宇佐見 衛 様 宇佐美雄介 様 内田 宏 様 内田裕康 様 内田陽三 様 内海和之 様 卯木 肇 様 海野俊一郎 様 江口栄治 様 江黒雅美 様 江角郷史 様 江藤修治 様 海老名 昂 様 海老原靖幸 様 大井 篤 様 大石克洋 様 大塚 敦 様 大木 隆 様 大熊 誠 様 大倉喬雄 様 大坂一義 様 大澤悦治 様 大澤徳恭 様 大沢 宏 様 大島道雄 様 大島光長 様 大島康正 様 太田真治 様 太田正三 様 太田良久 様 大谷誠司 様 大西信也 様 大沼正博 様 大野昌美 様 大野廉生 様 大橋 浩 様 大林一広 様 大原慶一 様 大平淳一 様 大堀一充 様 大森 憲 様 大山武志 様 大和田 忍 様 岡井和一 様 岡田昌士 様 緒方 徹 様 岡村 健 様 岡本賢一郎 様 岡本健一 様 岡本岳彦 様 岡本 正 様 岡本博夫 様 岡本 浩 様 荻本洋子 様 荻原貞雄 様 奥田道生 様 奥村恒夫 様 小椋康宏 様 小栗真吾 様 小澤孝正 様 落合 健 様 乙黒絵里 様 乙黒 勤 様 乙部千寿子 様 小野洋二 様 小野打 真 様 小俣真一 様 小俣良一 様 織井啓介 様 甲斐文敏 様 海江田誠司 様 柿田智行 様 蠣田春久 様 柿沼正明 様 角野公則 様 籠池宗平 様 笠松弘典 様 櫻尾昭彦 様 梶山征爾 様 片桐一平 様 片山光代 様 勝沼依久 様 加藤俊一 様 加藤 卓 様 加藤真美 様 金森 良 様 金谷 研 様 鐘江健一郎 様 金子恵美 様 金子俊太郎 様 金子喜弘 様 兼松勝弘 様 鹿野泰孝 様 加納正三 様 樺澤精一 様 釜井章三 様 鎌田茂男 様 鎌田忠吉 様 狩生 茂 様 川合広保 様 加輪上浩之 様 河口脩一 様 川口 卓 様 河久保弘和 様 川崎勝昭 様 河崎 卓 様 川崎忠一 様 川添 淳 様 川田 隆 様 川西三郎 様 神田和幸 様 神田俊彦 様 木川 真 様 菊岡昭謙 様 菊竹秀敏 様 菊地政夫 様 岸田一男 様 北原繁美 様 北原久己 様 北原義雄 様 北村輝文 様 木津浩司 様 木下節男 様 木下智雄 様 木村一郎 様 木村武彦 様 九鬼 聡 様 草薙 潤 様 朽津精一 様 工藤 章 様 久保敬三 様 久保豊子 様 久保田友康 様 熊澤輝彦 様 倉倉秀実 様 倉崎伸一朗 様 栗原浩史 様 棚沢政郎 様 黒川嘉郎 様 黒澤謙一 様 黒田 尚 様 黒田 泰 様 桑名道隆 様 桑原隆人 様 小池芳規 様 小池良司 様 小出洋朗 様 郷 寛幾 様 合田 洋 様 高着敦史 様 小久保和夫 様 小久保嘉郎 様 小島 繁 様 小高正敏 様 小林 功 様 小林克信 様 小林成古 様 小林博一 様 小林正明 様 小林正元 様 小舟 賢 様 小堀公男 様 小松幹太 様 小美野広行 様 小宮 修 様 小室 眞 様 小山和秀 様 小山哲司 様 小山巖也 様 紺谷信也 様 近堂一郎 様 近藤康裕 様 済藤 昭 様 斎藤顕次 様 斎藤健介 様 斎藤 徹 様 齊藤俊樹 様 斎藤英秋 様 齊藤 康 様 齊之平伸一 様 坂井幹一 様 榊 成明 様 榊原貞夫 様 坂西秀都 様 坂本茂樹 様 坂本慎一郎 様 坂本威夫 様 坂本武文 様 坂本暢明 様 坂本秀雄 様 坂本幸雄 様 坂本良夫 様 櫻井 哲 様 佐古田 明 様 迫田裕三 様 佐々木宏明 様 薩摩林俊彦 様 佐藤 明 様 佐藤一郎 様

銘板色

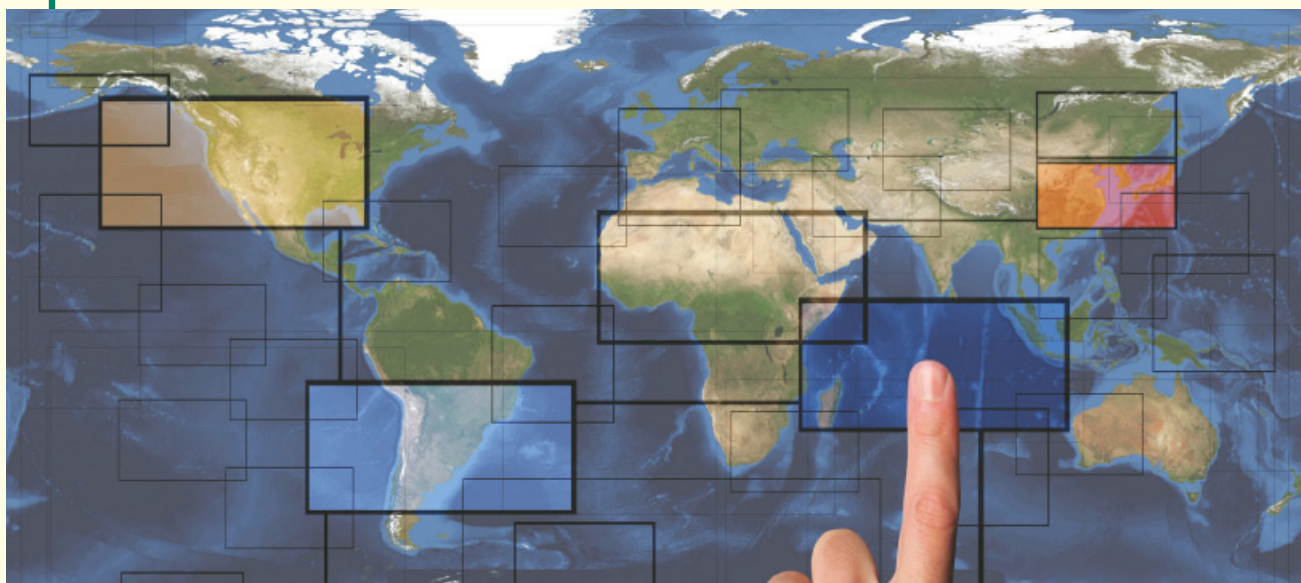
- 【ブロンズ】
個人：30万円以上
法人：100万円以上
 - 【シルバー】
個人：100万円以上
法人：500万円以上
 - 【ゴールド】
個人：1,000万円以上
法人：5,000万円以上
 - 【プラチナ】
個人：3,000万円以上
法人：1億円以上
- （金額は累計）

1年間のインターバルを経て、 社会学部連続市民講座を再開しました

2010年、社会学部では、1年間のインターバルを経て全8回の連続市民講座を開講しています。2010年10月までに5回が終了していますが、今後も継続的開催を検討してまいります。2010年のテーマは、「ローカル、ナショナル、グローバル～世界は小さくなったのか」であり、それぞれの用語が現代にどのような意味を持っているかを様々な視点から考察していきます。過去3期にわたり実施してきた連続市民講座と同様に、一橋大学社会学部の学際的で総合的な特長を活かす取り組みです。多くの市民、そして高校生のご参加をお待ちしております。

■2010年度講座一覧（今後実施分については、変更の可能性があります。）

日程	担当者	タイトル
4月17日（土）	伊豫谷登士翁	ローカル、ナショナル、グローバル～グローバル空間のローカルな編成
5月15日（土）	糟谷憲一	世界・アジアのなかの日朝関係～19世紀後半から現在まで
6月19日（土）	マイク・モラスキー	日本におけるジャズ受容～異文化の摂取・消化・再生を考える
7月17日（土）	小井土彰宏	地域の中でせめぎ合うグローバルとナショナル～北米大陸での経験
10月16日（土）	浅見靖仁	タイの外国人労働者受け入れ政策～医療保険と子供の教育問題を中心に
11月13日（土）	春日直樹	フィジー～公立老人ホームで考える
12月18日（土）	岡崎 彰	音響・国境・望郷～ローカルな音楽がグローバル化するとき
1月22日（土）	伊藤るり	〈庇護の地〉フランスの変容と苦悩～英仏海峡トンネルの町・カレーの事例から



会場 兼松講堂（一橋大学国立西キャンパス）

時間 13：30～15：00

参加方法 参加は無料。どなたでも入場できます。当日、直接会場までお越しください。

問い合わせ先 一橋大学社会学部・社会学研究科事務部

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL：042-580-8212 FAX：042-580-8210 E-mail：info@soc.hit-u.ac.jp

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長（総務、財務、社会連携担当） 山内 進

〈編集長〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授 松井 剛
 経済学研究科教授 水岡不二雄
 法学研究科准教授 屋敷二郎
 社会学研究科教授 阪西紀子
 国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾
 経済研究所教授 青木玲子

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

図書印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学企画・広報室広報担当
 〒186-8601 東京都国立市中2-1
 Tel: 042-580-8032 Fax: 042-580-8016
 http://www.hit-u.ac.jp/
 koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。

一橋大学企画・広報室広報担当

koho1284@dm.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の

無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先

一橋大学企画・広報室広報担当

TEL: 042-580-8032

編集部から

日本のGDPが中国に抜き去られる日が、近づいた。

ネオリベリズムと脱工業化社会の誘惑に乗ってマネーゲームにうつつを抜かしたあげく、リーマンショックなどの危機が爆発。小泉・竹中路線も日本経済を成長軌道に乗せることに失敗、格差拡大・地域経済疲弊をもたらした。対照的に、中国は、国家が経済介入して投機資金侵入を阻止しつつ、世界から工業投資を集め、「世界の工場」として経済を着実に成長させた。

金融資本主義か産業資本主義か、投機資金の跳梁を自由放任に委ねるか公的に管理するか——中国は、このどちらの対立軸でも後者を択び、成功した。

日本の閉塞は民主党政権を生んだが、現在の指導者は経済の学識も政策への明晰さも乏しいまま、権力の座にしがみついている。「雇用」と口先だけで叫んでも、力強い成長がなければ、ただ空しい。

かくて疲弊した日本経済と政治を見透かすかのよう、中国は、尖閣諸島は中国固有の領土と主張、船長を逮捕した日本にさまざまな対抗措置をとりはじめた。

リーダーが経済学にも国際関係にも向ければ、日本の前途は殆い。本学の「知と業のフロンティア」こそ、この闇を打開してほしいと希う。(FM)

2010年9月25日

創立135周年・国立移転80周年記念式典を
 挙りました



1875年（明治8年）9月、一橋大学の前身である商法講習所が東京銀座尾張町に誕生しました。1923年（大正12年）関東大震災により、当時神田一ツ橋にあった東京商科大学（現：一橋大学）の建物の大半が倒壊。小平・国立へのキャンパス移転計画が始動、1930年（昭和5年）に学部本部の移転が完了しました。

2010年9月25日、創立135周年・国立移転80周年の記念式典および祝賀会を開催いたしました。



135th Anniversary
 80 years in Kunitachi

記念式典 場所：兼松講堂



奏楽

一橋大学津田塾大学吹奏楽団
 曲目：百年祭序曲
 （ジェームズ・バーンズ作曲）



式辞

一橋大学長
 杉山武彦



来賓祝辞

国立市長
 関口 博氏



来賓祝辞

文部科学省
 大臣官房審議官
 小松親次郎氏



来賓祝辞

社団法人如水会
 理事長
 松本正義氏



記念映像会

国立移転
 1930年当時の
 記念映像会



一橋の歌 斉唱

一橋大学津田塾大学混声合唱団
 ユマニテ

祝賀会 場所：マーキュリータワー7階ホール



挨拶

一橋大学長
 杉山武彦



乾杯

一橋大学
 名誉教授
 佐藤定幸氏



演武

一橋大学
 体育会応援部



閉会

一橋大学
 理事・副学長
 山内 進



一橋大学創立135周年・国立移転80周年記念講演会

テーマ：**変動する世界経済と日本企業の革新**

日時：2010年11月29日(月) 13時開演(12時30分開場)

会場：如水会館 2階スターホール
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-1-1
TEL：03-3261-1101(代表)

ご参加：無料・先着200名

氏名・所属・連絡先を明記の上、2010年11月19日(金)までに、
E-mailまたはFAXでお申し込みください。

【創立135周年・国立移転80周年記念講演会担当】

E-mail：gen-sh.g@dm.hit-u.ac.jp FAX：042-580-8006

プログラム

開会挨拶：山内 進 一橋大学理事・副学長

講演：「日本企業、再飛躍の条件—グローバル競争に打ち勝つ知恵と戦略—」

伊藤邦雄 一橋大学商学研究科教授

「パラダイムシフトとグローバル化する企業経営—変化への対応と事業精神—」

松本正義 住友電気工業株式会社社長

ディスカッション：

松本正義 住友電気工業株式会社社長

伊藤邦雄 一橋大学商学研究科教授

司会／山下裕子 一橋大学商学研究科准教授

閉会挨拶：杉山武彦 一橋大学長

お問い合わせ先：〒186-8601 東京都国立市中2-1
一橋大学総務部総務課 TEL：042-580-8010



135th Anniversary
80 years in Kunitachi